Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要
教育科学第75集別刷　令和２年３月

戦争体験「語り」の継承とアーカイブ（7）

― 広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」を事例として ―

外　池　　智
（秋田大学教育文化学部）

Study about inheritance of telling war experience (7)

- Hiroshima "a-bomb survivors legend" and Nagasaki "exchange evidence" as a case study-

TONOIKE, Satoshi

Akita University

秋田大学教育文化学部研究紀要　教育科学部門　75　pp. 49 ～ 80　2020

戦争体験「語り」の継承とアーカイブ（7）

― 広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」を事例として ―

外　池　　智
（秋田大学教育文化学部）

Study about inheritance of telling war experience (7)
- Hiroshima "a-bomb survivors legend" and Nagasaki "exchange evidence" as a case study-

TONOIKE, Satoshi

Abstract

This study is in published studies on the development of peace education of the next generation using hierarchical archiving working from2015, continuing research studies on the inheritance of war has promoted research on war-related sites are promoted from the2009 fiscal year,2012 year telling.

Age of war after World War II 71 years have passed, and talk about the experience of war if 10 -year-old, no longer the population total population 8%. Narrative in such a situation, a direct war experience, not by using the hierarchical archive should be called "peace education of the next generation" so to speak, practice is ever-changing and expanded.

Nagasaki has been approached from the city of Hiroshima last year continue to be tackled from fiscal year 2012 (Heisei 24), such circumstances "a-bomb survivors tradition" and 2014 (Heisei 26) year " Family survivors "and take" Exchange witnesses ".

Key Word : Study about inheritance of telling war experience, Practice of Hiroshima "a-bomb survivors legend",Nagasaki a-bomb experience about (exchage evidence) promotion project

１．本研究の目的

本研究は，2009（平成 21）年度から推進している戦争遺跡に関する研究[1]，2012（平成 24）年度から推進している戦争体験の「語り」の継承に関する研究[2], 2015（平成 27）年度から取り組んでいる継承的アーカイブを活用した「次世代の平和教育」の展開に関する研究[3]の継続研究であり，さらに 2018（平成 30）年度から取り組んでいる地域の継承的アーカイブと学習材としての活用に関する研究[4]の一端を発表するものである。

戦後 74 年の歳月が経ち，戦争体験を語れる終戦時の年齢を仮に 10 歳とすれば，もはやその人口は全人口の５％を切っている。こうした状況の中，あの貴重な体験や記憶を残し, 継承していこうとする試みが続いている。また教育現場においても，直接的な戦争体験の「語り」ではなく，そうした継承的アーカイブを活用したいわば「次世代の平和教育[5]」と呼ぶべき実践が次々と展開されている。

本稿では, 今年度で５回目となった秋田大学での講話で, 広島市「被爆体験伝承者」と長崎市「交流証言者」の「語り」を取り上げたい。これまでの分析と同様に，文字起こしによるプロット毎の「語り」の時間と文字数からの量的分析, また聴講者からのアンケート結果（自由記述）からの質的分析により検討していきたい。

２．これまでの広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「家族証言者」「交流証言者」講話

本研究では, まず戦争体験の「語り」の継承について, 以下の様な取り組みを取り上げてきた。

本研究では，広島市「被爆体験伝承者」養成プロジェクトを経て, 第１期生が誕生した 2015（平成 27）年より, 実際に秋田大学に伝承者をお呼びして，講話をしていただいている。１回目の 2015（平成 27）年には, 広島市「被爆体験伝承者」の髙岡昌裕氏（講話時 36 歳），２回目の 2016（平成 28）年には広島市「被爆体験伝承者」の楢

Akita University

資料１　これまで取り上げてきた戦争体験「語り」の継承プログラム

区分	事業名	事業主体	期間
広島（３件）	・「被爆体験伝承者」養成プロジェクト	広島市市民局	2012-
	・「ヒロシマ　ピースボランティア」事業	広島平和文化センター	1998-
	・「原爆遺跡フィールドワーク」	原爆遺跡保存運動懇談会	1990-
長崎（３件）	・「青少年ピースボランティア」事業	長崎市被爆継承課平和学習係	2002-
	・「被爆体験記朗読事業（朗読会 / 朗読ボランティア育成・派遣）」	国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館	2011-
	・長崎市「『語り継ぐ家族の被爆体験（家族証言）』推進事業」	長崎市被爆継承課平和学習係	2014-
沖縄（４件）	・「ボランティア養成講座」	沖縄県平和祈念資料館	2004-2006
	・「子や孫に語り継ぐ平和のウムイ事業」	沖縄県平和祈念資料館	2012-2013
	・「次世代プロジェクト」	ひめゆり平和祈念資料館	2002-
	・「南風原平和ガイド養成講座」	南風原町	2007-
国立市（１件）	・「くにたち原爆体験伝承者」育成プロジェクト	国立市市長室平和･ダイバーシティ推進係	2014-2018

原泰一氏（講話時 40 歳）と，さらに長崎市からも「家族証言者[6]」の佐藤直子氏（講話時 52 歳），３回目の 2017（平成 29）年は広島市「被爆体験伝承者」の藤井幸恵氏（講話時 73 歳）と，長崎市から「交流証言者[7]」の松野世菜氏（講話時 19 歳），４回目の 2018（平成 30）年には，広島市「被爆体験伝承者」の山岡美知子氏（講話時 67 歳），長崎市「家族証言者」の平田周氏（講話時 59 歳）をお呼びして講話を実施した。そして，５回目の今回にお呼びしたのは，広島市「被爆体験伝承者」の石綿浩一氏（講話時 55 歳）と長崎市「交流証言者」の田平由布子氏（講話時 26 歳）である。これまで，秋田大学にお呼びした広島市「被爆体験伝承者」は４人とも全て第１期生であったが，石綿氏は第２期生であり，初めてのケースである。

３．今年度の講話の日程と講話者の略歴

2019（令和元）年度は，７月 25 日（木）に講話を実施した。主な日程は以下の通りである。講話時間は，それぞれご本人と相談し，基本的には例年同様に石綿氏は１時間，田平氏は 40 分でお願いした。

14：20 ～ 14：30　受付
14：30 ～ 14：50　基調報告（秋田大学教育文化学部教授　外池　智）
「広島市『被爆体験伝承者』・長崎市『交流証言者』講話―戦争体験『語り』の継承―」
14：50 ～ 15：50　広島市「被爆体験伝承者」講話（石綿浩一氏）
15：50 ～ 16：00　休憩
16：00 ～ 16：35　長崎市「交流証言者」講話（田平由布子氏）
16：35 ～ 17：00　質疑応答

講話実施の順に，まず広島市「被爆体験伝承者」の石綿浩一氏の略歴について取り上げる。石綿氏は，1964（昭和 39）年，神奈川県横浜市生まれ，講話時 55 歳。両親や親戚に被爆者や被爆に関係する方いはない。「ヒロシマを学ぼうとしたきっかけは，小学校６年生の時。社会科の教科書に載っていた原爆投下後のきのこ雲の写真[8]」であるという。前述の通り，これまで秋田大学にお呼びした４人の講話者は全て１期生であったが，石綿氏は初めての２期生である。広島市の「被爆体験伝承者」養成の募集を HP で見て興味が湧き，応募したという[9]。2013（平成 25）年から３年間の養成期間を経て，2016（平成 28）年に無事終了。その後は関東地方を中心に講話を実施している。秋田大学での講話は，ほぼ 20 回目になるとの事である。

次に，長崎市「交流証言者」の田平由布子氏の略歴について取り上げる。田平氏は，1993（平成５）年，長崎県長崎市生まれ。講話時 26 歳。長崎大学経済学部卒業。在学中の 2014（平成 26）年にナガサキ・ユース代表団[10]第２期生として活動した。ニューヨーク国連本部において NPT 再検討会議の傍聴や NGO との意見交換等を経験し，帰国後はその経験をもとに中学生へ平和教育を行った。2017（平成 29）年夏に長崎市の「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）推進事業」に応募した。仕事と両立しながら，被爆者である吉田勲氏（享年 77 歳）の体験を継承し，2018 年（平成 30）10 月に講話を初披露した。その後は，日本非核宣言自治体協議会の研修や

広島市「被爆体験伝承者」石綿浩一氏

Akita University

長崎市「交流証言者」田平由布子氏

長崎原爆資料館での講話を担当してきた。体験の聞き取り途中に吉田氏が急逝したことで，「いかにして非体験者が継承するか」を自らの課題ととらえ，一人でも多くの人に吉田氏の思いを伝えるべく活動している[11]。秋田大学での講話は，18 回目になる。

４．講話の構成と内容

実施した講話のお二人のプロットは，以下の資料３，資料４の通りである。

資料３　石綿浩一氏による広島市「被爆体験伝承者」講和（60 分 17 秒，20,868 文字）

○自己紹介，イントロダクション
（３分 59 秒（6.6%），1,724 文字（8.3%））
１．「被爆体験伝承者」とは，今日の話の構成
（１分 36 秒（2.7%），590 文字（2.8%））
２．被爆の実相（10 分２秒（16.6%），3,330 文字（16.0%））
３．被爆者，細川浩史さんの体験①
（５分 49 秒（9.6%），1,869 文字（9.0%））
４．被爆絵の説明と学徒動員，建物疎開について
（３分３秒（5.1%），1,105 文字（5.3%））
５．被爆者，細川浩史さんの体験②
（48 秒（1.3%），285 文字（1.4%））
６．被爆者の様々な様子
（４分７秒（6.8%），1,254 文字（6.0%））
７．被爆者，細川浩史さんの体験③
（29 秒（0.8%），361 文字（1.7%））
８．妹瑤子さんの日記と被爆
（17 分 12 秒（28.5%），5,830 文字（28.0%））
９．被爆者に対する差別といじめ
（９分 10 秒（10.2%），3,058 文字（14.7%））
10．現在の広島（３分２秒（5.0%），1,163 文字（5.6%））

・1～10 のタイトルは，石綿浩一氏講話時使用のパワーポイント及び文字起こしの内容から筆者作成

資料４　田平由布子氏による長崎市「交流証言者」講話（33 分 8 秒，6,819 文字）

○自己紹介（２分 36 秒（7.8%），609 文字（8.9%））
１．あなたにとって平和とは？
（３分 17 秒（9.9%），845 文字（12.4%））
２．被爆者である吉田勲さんの紹介
（１分 36 秒（4.8%），575 文字（8.4%））
３．長崎市への原爆投下と被爆の実相
（３分 31 秒（10.6%），633 文字（9.3%））
４．吉田勲さんの被爆体験
（３分 29 秒（10.5%），969 文字（14.2%））
５．戦後の吉田勲氏の暮らしと核廃絶活動
（７分 59 秒（24.1%），1,625 文字（23.8%））
６．吉田勲氏の動画
（２分 34 秒（7.7%），392 文字（5.7%））
７．現在の核兵器
（３分 38 秒（11.0%），783 文字（11.5%））
８．私にとって平和とは？
（２分３秒（6.2%），388 文字（5.7%））

・1～8のタイトルは，田平由布子氏講話時使用のパワーポイント及び文字起こしの内容から筆者作成。

実際の講話の内容は，巻末の資料５，資料６の通りである。実際の講話から質疑応答まで，全文掲載してある。また，石綿氏が継承した細川浩史氏の「被爆体験伝承者」養成プロジェクト時のプロフィールは，資料７（巻末）の通りである。

内容の構成は，当然ながらお二人とも違いはあるが，その中核となる部分については，基本的に以下の４点と共通している[12]。

・原爆投下までの歴史的背景や生活の様子
・被爆の実相
・被爆体験の「語り」
・平和への願い

これは，これまで実施した広島市「被爆体験伝承者」講話，さらに，長崎市「家族証言者」「交流証言者」講話においても同様のものであった。被爆体験の伝承講話としては，スタンダードな構成といえる。

次に，文字起こしをした資料５，資料６に基づいて整理した「語り」のプロット（資料３，資料４）に注目し，「語り」の時間，文字数の量的分析から指摘したい。

まず石綿氏の講話は，文字起こし分の時間で 60 分 17 秒，文字数だと 20,868 文字であった。一方の田平氏の講話は，文字起こし分の時間で 46 分 40 秒，文字数だと 9,969 文字であった。

注目したいのは，やはり「語り」の継承部分である。まず，石綿氏の講話では，「３．被爆者，細川浩史さんの体験①（５分 49 秒（9.6%），1,869 文字（9.0%））」，「５．被爆者，細川浩史さんの体験②（48 秒（1.3%），285 文字（1.4%））」，「７．被爆者，細川浩史さんの体験③（29

Akita University

秒（0.8%），361文字（1.7%））」と，とびとびの3か所になっており，合わせると時間では7分6秒（11.8%），文字数では2,515文字（12.1%）であった。今回の講話では，肝心の継承部分の「語り」は，時間も文字数も全体の1割程であったのである。これは，これまで秋田大学にお呼びした「被爆体験伝承者」の「語り」の中でも最も短い時間であり，最も少ない割合である[13]。ただし，被爆者である細川氏自身の体験ではないが，妹の瑤子さんの被爆体験も細川氏の「語り」の継承として考え，「8．妹瑤子さんの日記と被爆（17分12秒（28.5%），5,830文字（28.0%））」の部分を加えると，時間で24分18秒（40.3%），文字数で8,345文字（40.0%）となり，全体の4割を占める。「被爆体験伝承者」は，やはり基本的には元となる被爆者の体験を受け，その「語り」を継承するものであろう。そうした基本的な見方に立てば，石綿氏の「語り」の継承は，これまで秋田大学にお呼びした「被爆体験伝承者」の「語り」の中では，特別な事例である。

一方の田平氏の講話では，「2．被爆者である吉田勲さんの紹介（1分36秒（4.8%），575文字（8.4%））」，「4．吉田勲さんの被爆体験（3分29秒（10.5%），969文字（14.2%））」，「5．戦後の吉田勲氏の暮らしと核廃絶活動（7分59秒（24.1%），1,625文字（23.8%））」の3か所で，合わせると時間では13分4秒（39.4%），文字数では3,169文字（46.5%）であった。こちらも，これまで秋田大学にお呼びした「家族証言者」「交流証言者」の中では最も短く，最も少ない割合となった[14]。しかし，「6．吉田勲氏の動画（2分34秒（7.7%），392文字（5.7%））」部分を入れると，時間で15分38秒（47.2%），文字数で3,561文字（52.2%）と講話全体のほぼ半分を占める。

また，田平氏は秋田大学にお呼びした「交流証言者」としては二人目になるが，2017（平成29）年にお呼びした松野世菜氏と内容構成も類似している点も指摘しておきたい。3回目の2017（平成29）年にお呼びした松野世菜氏（「交流証言者」）の内容構成は，以下の通りであった。

資料8　松野世菜氏による長崎市「交流証言者」講話（36分45秒，8,969文字）

1．「交流証言者」を始めた動機
　（9分55秒（27.0%），1,140文字（12.7%））
2．長崎市への原爆投下とその被害
　（2分45秒（7.5%），777文字（8.7%））
3．山脇佳朗さんの被爆体験
　（17分20秒（47.2%），5,081文字（56.7%））
4．平和とは？
　（6分45秒（18.4%），1,971文字（22.0%））

・松野世菜氏講話時使用のパワーポイント及び文字起こしの内容から筆者作成（前掲註3報告書参照）。

先の松野氏の場合，「家族証言者」ではなく「交流証言者」であるせいか，「3．山脇佳朗さんの被爆体験」の部分では，松野氏が継承した山脇氏の写真を活用していた。そして，今回の田平氏の場合も，「6．吉田勲氏の動画」で，田平氏が継承した吉田氏の動画を活用していた。さらに，松野氏の講話では，最後に「4．平和とは？」で，聴講者に考えさせる構成であったが，今回の田平氏の場合も，最初に「1．あなたにとって平和とは？」を一旦考えさせ，そして最後にまた「8．私にとって平和とは？」で，聴講者に考えさせる構成であった。今回，田平氏にそのことを伺うと，特段影響を受けている訳でないとの事であった[15]。偶然にも類似した構成となった事には注目したい。

5．参加者の感想

参加者は，秋田大学教育文化学部の社会科教育の免許取得科目を受講している学生24名，ABS秋田放送，秋田魁新報社等のマスコミ関係者であった。

聴講したアンケートとして2点，「○実際にそれぞれの『語り』を聞いた感想・意見等をお聞かせください。1．広島市『被爆体験伝承者』講話，2．長崎市『交流証言者』講話」を記入してもらった（資料9参照）。回収数は，「1．広島市『被爆体験伝承者』講話」については24件，「2．長崎市『交流証言者』講話」については22件であった。こうしたアンケート結果について，記述の内容から質的分析を試みたい。

（1）広島市「被爆体験伝承者」石綿浩一氏の講話への感想・意見

まず，広島市「被爆体験伝承者」の石綿浩一氏の講話への感想・意見について，多かった順に3点取り上げたい。

まず最も多かった感想は，「心の傷」，残された人々の苦しみや差別に関する感想で，全24件中14件[16]（58.3%）であった。例えば，（1-13）「戦争による被害によって，差別が生まれてしまうという事実を知り，とても胸が痛くなりました。おつかいのためのバスに乗った女の子が乗り合わせた少年たちに『おばけだ！』と言われ，途中でバスを降りたというエピソードは，とても悲しい気持ちになりました」，（1-14）「石綿さんのお話を聞いて，一番印象に残ったのは『原爆は体だけではなく心に傷をつけた』という言葉です。（中略―筆者）むしろ，自分が被爆したことにより自分が差別対象になってしまった悲しみや，自分だけ助かってしまったことへの後悔などがあって，しかもそれが何十年も続いていることを知り，これこそ自分たちが向き合うことの1つなのではと思いました」，（1-19）「被爆の被害にばかり目がいきがちだ

Akita University

と思うのですが，いじめや差別について知ることができてよかったです。あってはならないことだと思います」等の感想である。前述の様に，これまで広島市「被爆体験伝承者」は石綿氏を含め5人の方をお呼びしているが，この感想を取り上げるのは初めてであるし，ましてや最も多い感想となったのも初めてである。ほぼ6割の学生が取り上げている事なので，聴講者にとってかなり印象に残った内容であったと言える。この点については，後に詳述したい。

次に多かったのは，イメージし易い，リアルであった等の感想で，全24件中10件[17]（41.7％）であった。毎年多く見られる感想の一つである。例えば，(1-12)「石綿さんの語りは，具体的な例えや，実演があり，戦争を，原子爆弾を体験していない私でも想像しやすかったです」，(1-16)「被害者の方々の絵や写真からとてもリアルな情景が伝わってきました。『爆弾が自分に向かって落ちてきた』や『皮膚がスライムのように溶けた』という表現が生々しさを感じさせました」，(1-24)「聞いているだけで，怖くて悲しくてつらくなってきた。当時の悲惨さがとても伝わってきて，被爆者の話などはテレビで聞いたことがあったが，比べ物にならないくらい，しっかりと伝わってきた」等の感想である。石綿氏の「語り」も，これまでの講話者の様にパワーポイントで写真や絵画等の視聴覚資料を効果的に活用しながらの「語り」であり，それが聴講者の感想にも反映されているのである。ただし，石綿氏の場合は用意されたパワーポイントを順に捲っていくのではなく，所々往還しながらの「語り」であった。用意されたパワーポイントは57枚であったが，実際に講話中に使用したのは47枚で，その内訳は，写真17枚，絵画13枚，文字3枚，写真と絵の複合，グラフ，地図，日記はそれぞれ1枚ずつであった。やはり，写真や絵画などの視聴覚資料が全体の9割以上を占める。とりわけ，被爆体験の「語り」の部分では，絵画資料の多用が石渡氏の特色であった。

3番目に多かったのは，「語り」の継承の大切さに関する感想で，全24件中6件[18]（25.0％）であった。例えば，(1-2)「言葉には力があって『語り』を受け継いでいくことが重要だと思いました。（中略―筆者）フィクションではなく，当時の事実である「語り」を受け継ぎ，守っていくことが必要だと改めて感じました」，(1-10)「今日のお話を聞いて，被爆体験を継承していく必要性を改めて痛感しました」，(1-22)「今後は，実際の被爆体験者が減り，それが課題にもなっているので，石綿さんのような伝承者が必要なのではないかと感じた。また，子ども達に伝える身として，このような話に触れることが必要だとも感じた」等の感想である。例年では，(1-22）の感想の様にこれから教師になるとの文脈も含めて「継承」の大切さを述べる感想が多かった。しかし，今回はそうではなく，純粋に「語り」の継承の大切さを述べる感想が多かった。石綿氏自身も，聴講者である学生達が社会科の教員を目指す学生であることを分かっており，講話の中でそうした自覚を促すような発言があったにも拘らず，存外教員になる身としての継承といった感想は少なかった。

（2）長崎市「交流証言者」田平由布子氏の講話への感想・意見

次に，長崎市「交流証言者」田平由布子氏の講話への感想・意見について，多かった順に4点取り上げたい。

まず，最も多かった感想は田平氏がその「語り」を引き継いだ吉田勲氏の行動力と田平氏自身の行動力についての感想で，全22件中11件[19]（50.0％）であった。例えば，(2-2)「吉田勲さんの自分の体験から『核兵器をなくす』『長崎を最後の被爆地にしよう』『自分たちと同じ思いをしてほしくない』という熱意をもった行動は偉大だと感じました」，(2-7)「『自分たちと同じ思いをしてほしくない』という思いが，被爆者であった吉田さんの48年間誰にも明かさなかった姿勢を変えたのだなと思った。『どうして何もできなかったのか，してこなかったのか』という思いから行動した吉田さんの行動が，自分も被爆者でありながら他の被爆者も救うことへとつながったのだと思った」，(2-9)「自分や自分のほんのわずかな身の回りだけでなく，世界全体の平和という大きな規模で平和について考え，行動を起こし，活動していくのができることって本当にすごいことだなと思います。吉田氏の取り組みもさることながら，田平さんの行動力にも驚かされ，純粋に尊敬します」等の感想である。吉田氏，田平氏ともに，日本国内のみならず国外でも精力的に核廃絶に向けての活動を展開してきており，その行動力に対する素直な感想である。

次に多かったのは，「平和とは何か」についての感想で，全22件中9件[20]（40.9％）であった。例えば，(2-3)「冒頭で聞かれた『平和』とは何かという問いを自分たちが日々考えて行動して，自らの手で平和な世の中を実現できるようにしていきたいと思います」，(2-17)「冒頭部分で『あなたにとって平和とは？』と問われた時に，私は『今，不自由なく生きていられること，悲惨な事件や事故がない生活を送られること』が平和なのではないかと思いました」，(2-24)「平和とは何かを考えさせられる内容でした。戦争がわるいものであるから，こういった活動で広めているのではなく，平和を目的として，こうした活動をされているのだなというのが，伝わってくるような講話でした」等の感想である。これは，講話の冒頭，そして講話の最後のまとめで田平氏自身が学生達

Akita University

に投げかけた言葉である。当然ながら印象に残ったのであろう。前述した様に，2017（平成29）年にお呼びした「交流証言者」である松野世菜氏（講話時19歳）も，同じく講話の冒頭とまとめにおいて，「平和と何か」を学生達に問いかける構成であった。

最後は，これから伝えていくことの大切さについての感想で全22件中7件[21]（31.8％）であった。例えば，(2-6)「吉田さんの活動や長崎での様子といったことを知ることができ，とてもよかった。被爆者の想いや考えを多くの人に知ってもらうことの重要性や，それを後の若い世代に伝えていく使命といったことを考えさせられた」，(2-13)「自分たちと同じ思いをしてほしくないという言葉がとても印象に残りました。それはつらい，悲しい，痛いなど様々であることも興味深いと思います。また，その多様な考えをどう伝えるかをこれから大切にして考えていきたいと思います」，(2-14)「私は授業で日本人は敵対していた国々の人々を苦しめてしまった過去があることを知りました。平和を求めていく上で，私たちはこの事実を受け入れながら被爆体験などの戦争体験を伝えていく必要があると思います」等の感想である。前述の石綿氏への感想と同様に，これから教師になる身としてどう教えていくかの感想も4件[22]あり，ただ単に「伝える」文脈ではなく，こうした教育上の文脈での感想も入れれば，実際は13件（59.1％）と最も多い感想となる。

また，被爆後のいじめや差別に関する感想も全22件中7件[23]であった。例えば，(2-11)「被爆という経験，体験がどれほどの痛みを与えるものなのかということが吉田さんの人生を通して知ることができた。“被爆者”というこのレッテルがいじめにつながったり，周りの社会からの圧迫が起きたりしたということがありありと映像がイメージできる話でした」，(2-12)「田平さんの語りは，私たちに訴えかけるもので，臨場感がありました。原子爆弾投下のお話もそうですが，投下後のお話や，被爆された方のその後の苦しみ（いじめや症状）についてのお話もたくさんしていただいてとても考えさせられました」，(2-20)「被爆したことで放射線で後遺症が残ってしまうことは知っていたが，被爆者へのいじめや，人付き合いの面で肩身のせまい思いをすることがあることを初めて知った。正直なところ，考えたこともなかった。被爆者は実際的な症状などの被害だけでなくいじめなどの被害もあったことを心にとめておきたい」等の感想である。前述した様に，広島の石綿氏の「語り」への感想でも多く見られたものである。学生達にとっては，被爆時その時の被害はこれまで見聞きしていたものの，その後の人生を生きていった被爆者達へのいじめや差別については初めて聞く者が多く，その事への率直な印象であろう。

6．小括

最後に今回の講話の小括として，3点述べたい。

まず1点目は，伝承者による「語り」が安定してきた事である。これは，内容構成面，「語り」の方法面の両面において指摘できる。

まず内容構成について，前述した様に，今回のお二人とも基本的な内容構成は，「原爆投下までの歴史的背景や生活の様子」，「被爆の実相」「被爆体験の『語り』」，「平和への願い」の4点によって構成されていた。これは，これまでお呼びした広島市「被爆体験伝承者」，長崎市「家族証言者」「交流証言者」共に同様である。語り部によって，どこに力点を置くかの違いはあるが，基本的にはこの4点により「語り」が構成されており，その基本的な構成は「安定」してきたといえる。

また，その「語り」の方法についても，純粋に被爆体験「語り」だけではなく，パワーポイントによる視聴覚資料の効果的活用や元となる被爆体験者の動画や肉声を用いて，いわば多様なメディアを活用しての「語り」となっている点は，同様に「安定」してきた方法といえる。例えば，今回の石綿氏の場合は，前述した通り，9割以上が写真や絵画であり，また田平氏の場合も，全43枚のスライド（その内訳は写真27枚，地図6枚，文字5枚，写真と地図の複合，ポスター，グラフ，年表，新聞が各1枚ずつ）で，写真が全体の約2/3を占めていた。

次に，2点目は語られるのは必ずしも元となる被爆者の体験だけではなく，被爆時の典型的な体験（最大公約数的体験）を語る事で補う事もある点である。例えば，石綿氏の「語り」において，量的分析の観点から言えば，被爆体験者の細川氏の体験部分は，時間では7分6秒（11.8％），文字数では2,515文字（12.1％）程で，全体の1割程であった。そして，聴講者の感想を通じた質的分析からは，前述した様にまず最も多かった感想は，「心の傷」，残された人々の苦しみや差別に関する感想であった。しかし，例えば(1-13)「おつかいのためのバスに乗った女の子が乗り合わせた少年たちに『おばけだ！』と言われ，途中でバスを降りたというエピソードは，とても悲しい気持ちになりました」のエピソードは，筆者自身も含めて聴講する学生達の心に響く「語り」であったが，実際は細川浩史氏自身の体験ではない。しかし，こうした被爆によりいじめや差別を受けた典型的エピソードを織り交ぜる事により，「語り」をよりリアルなものにしていたのである。厳密にいえば，「被爆伝承者」は，オリジナルとなる被爆体験の忠実なる継承者であらねばならない。しかし，講話として構成する場合，必ずしも元となる被爆者の体験のみを語るだけではなく，いわば“典型的”な被爆体験を交え「語り」を構成する場合もある事が分かる。ましてその部分の「語り」が，聴講者にとっ

Akita University

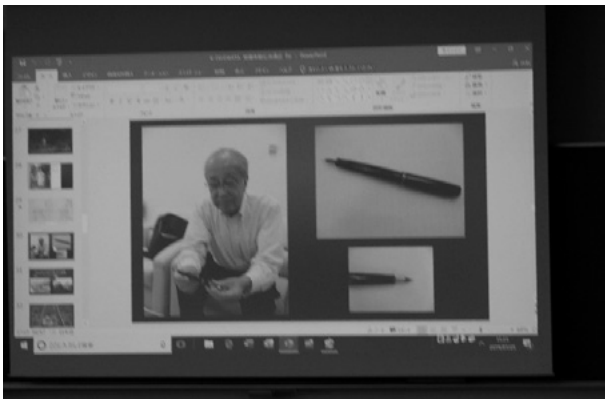
て最も印象に残った「語り」として“記憶”される事もあるのである。

関連して，さらに注意しておきたいのは，「語り」と視聴覚資料のズレである。例えば，今回の石綿氏の「語り」において，確かに語られている話は細川氏の被爆体験であるが，見せられている絵画は細川氏が直接描いたものではない。類似の光景を他者が描いたものなのである。すなわち，細川氏の被爆体験を，被爆体験の典型的事例（被爆体験の総体）による視聴覚資料で補っているのである[24]。こうした事例は，今回の石綿氏の場合だけではなく，昨年調査した「くにたち原爆体験伝承者」の講話でも見受けられた事例である[25]。視聴覚資料の効果的活用と言えば聞こえは良いが，被爆体験の伝承を厳密に考えれば，「語り」とそれに合わせた視聴覚資料のズレは，聴講者自身も自覚しておく必要がある。

「伝承者」は，元の被爆者の「語り」の継承に対しては忠実である必要があるが，一方では現実的にあまり厳密に「語り」を構成する事も難しい。今後の「語り」の在り方について，その動向を注目したい点である。

原爆投下目標地点で会った相生橋

絵画の活用



被爆体験者の吉田勲氏

被爆体験者の細川浩史氏

「平和とは何か?」の問いかけ

1 2009-2011 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：21530972）。その内容は，拙著『2009-2011 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　「地域における戦争遺跡の複合的・総合的アーカイブと学習材としての活用」』（暁印刷，2015 年）としてまとめている。

2 2012-2014 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「戦争体験『語り』の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用」（課題番号：24531174）。その内容は，拙著『2012-2014 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　戦争体験「語り」の継承カリキュラムの開発と学習材としての活用』（2015 年，暁印刷）としてまとめている。

3 2015-2017 年度科学研究費補助金基盤研究（C）「継承的アーカイブの活用と『次世代の平和教育』の構築」（課題番号：15K04475）。その内容は，拙著『20015-2017 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書　継承的アーカイブの活用と「次世代の平和教育」の構築』（2018 年，八郎潟

Akita University

印刷）としてまとめている。

4 2018-2022度科学研究費補助金基盤研究（C）「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用」（課題番号：18K02606）。

5「次世代の平和教育」については，前掲註３の報告書にまとめている。その特色として，以下３点を指摘した。

（1）継承的アーカイブの活用

（2）戦後の平和希求活動への着眼

（3）目的的平和教育から方法的平和教育へ

6「家族証言者」とは，「被爆者の子，孫等の家族，及び被爆者と親戚関係にある者」である。長崎市「『語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）』推進事業実施要項」（2014年）「３　対象者の要件」による。

7「交流証言者」とは，「同居や団体活動などにより被爆者との密接な交流経験を有する者」または「被爆者と関わりはないが，体験を継承する意志の強い者」である。同上資料による。

8 石綿氏提供（2019年６月18日）資料の「プロフィール」による。

9 2019（令和元）年７月25日に，秋田大学で実施した「広島市『被爆体験伝承者』・長崎市『交流証言者』講話」の際での石綿浩一氏からの聞き取りによる。

10 ナガサキ・ユース代表団は，2013（平成25）年に始まった長崎県や長崎市，長崎大学でつくる核兵器廃絶長崎連絡協議会の募集に応じて集まった若者のグループ。2019（令和元）年７月25日に，秋田大学で実施した「広島市『被爆体験伝承者』・長崎市『交流証言者』講話」の際での田平由布子氏からの聞き取りによる。

11 田平氏提供（2019年６月19日）資料の「田平由布子プロフィール」による。

12 前掲註３報告書では，「被爆の実相」，「被爆体験の『語り』」，「平和への願い」の３点に整理していたが，これまでの「語り」の検討から新たに「原爆投下までの歴史的背景や生活の様子」を加え，４点とした。

13 例えば，第１回目の2015（平成27）年の髙岡昌裕氏は，「３　被爆体験伝承講話」「（１）新宅勝文さんの体験」部分で30分10秒（32.2%），8,056字（33.9%），第２回目の2016（平成28）年の楢原泰一氏は，「５．被爆体験伝承講話（岡田恵美子さんの被爆体験伝承）」の部分で12分33秒（20.2%），3,379文字（20.6%），第３回目の2017（平成29）年の藤井幸恵氏は，「２．森田さんと２年生の被害体験」の部分で，28分38秒（61.1%），7,381文字（59.3%），そして第４回目の2018（平成30）年の山岡美知子氏は，「３．当時20歳の母が見た被爆した広島の様子」の部分と「４．被爆体験者の岡田恵美子さんから聞いた原爆孤児の事」の部分で，合わせると13分54秒（23.1%），3,917文字（23.6%）あった（同上報告書参照）。

14 例えば，初めてお呼びした２回目の2016（平成28）年の佐藤直子氏（「家族証言者」）の場合は，「３．父池田早苗氏の紹介（４分00秒（8.0%），903文字（8.0%））」「４．紙芝居『原爆でみんな死んでいった　池田早苗さんの証言から』（13分20秒（33.4%），2,572文字（22.8%））」「５．紙芝居の補足（３分50秒（7.7%），1,010文字（8.9%））」「６．戦後の暮らし（11分48秒（23.6%），3,185文字（28.2%））」の部分で，時間では32分58秒（66.6%），文字数では7,670文字（67.9%）で全体の2/3を占めていた。３回目の2017（平成29）年の松野世菜氏（「交流証言者」）の場合は，「３．山脇佳朗さんの被爆体験」の部分で，時間で17分20秒（47.2%），文字数では5,081文字（56.7%）で，やはり全体の半分を占めていた。そして，４回目の2018（平成30）年の平田周氏（「家族証言者」）の場合は，「４．松尾敦之の日記による被爆体験」の部分で，時間で33分00秒（70.7%），文字数ではで6,850文字（68.7%），全体の７割を占めていた（同上報告書参照）。

15 前掲註10の聞き取りによる。

16 資料９の「１ 広島市被爆体験伝承者講話」の感想内，１，２，３，６，７，８，９，10，12，13，14，18，19，21の14件の感想である。

17 同上の内，３，11，12，15，16，17，19，22，23，24の10件の感想である。例えば（1-1）「原子爆弾のおそろしさを改めて感じた。語りの中で，助けを求めている人々に謝りながら逃げていくという話がとても印象的であった」，（1-8）「今日見せていただいた絵や写真でも悲惨さが伝わってきましたが，実際にはもっと凄惨な状況だったという話を聞いて，当時の様子を想像するのが苦しくなるほどでした」の様な，原爆の恐ろしさについての感想（１，４，５，８，14，20の６件）も含めれば16件となり，最も多い感想になる。

18 同上の内，２，４，８，10，20，22の６件の感想である。

19 資料９の「２ 長崎市交流証言者講話」の内，１，２，３，４，５，７，８，９，16，19，24の11件の感想である。

20 同上の内，１，３，８，９，12，14，17，19，24の９件の感想である。

21 同上の内，６，８，13，14，15，17，22の７件の感想である。

22 同上の内，２，９，10，24の４件の感想である。

23 同上の内，10，11，12，14，16，19，20の７件の感想である。

24 千人以上もの被爆体験を記録した伊藤明彦は，自身の著書『未来からの遺言―ある被爆者体験の伝記』（岩波書店，2012年）で，個人の被爆体験の「記憶」ゆえの危うさ，また被爆者の総体である“原爆太郎”の体験として，典型的被爆体験を示している。

25 拙著「地域における継承的アーカイブと学習材としての活用―『くにたち原爆体験伝承者』育成プロジェクトを事例として―」秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要編集委員会編『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第41号，（秋田大学教育文化学部附属教育実践総合センター），1-12頁参照。

Akita University

資料５

広島市「被爆体験伝承者」講話　石綿浩一氏（2019.7.25）文字起こし（60 分 17 秒，20,868 文字）

〇自己紹介，イントロダクション（3 分 59 秒，1,724 文字）

〇石綿　改めまして，こんにちは。ただいまご紹介にあずかりました，私，石綿浩一と申します。こういったお話をすると，必ず言われるのが，広島からですかって言われるんですけど，私は神奈川県横浜市の生まれで，神奈川県横浜市在住で，今日は羽田から１便の飛行機に乗って，秋田に来ました。

初めての秋田なんですけども，印象としましては，本当に飛行機の窓を見ますと，田んぼが多く，緑が生い茂って，非常にいいとこだなと思いました。で，おりた瞬間，暑い，これ一つです。そして，外池先生に迎えに来ていただきまして，大学キャンパスに入りました。お時間にして，ちょうど 12 時前だったかなと記憶してますけど，ちょっとお昼，まだとってなかったので，生協のほうにご案内していただいて，学食を食べてきました。あまりにもおなかが減ってましたので，豚丼の大盛りと，やっこ，そしてサラダ，さらにコロッケ，これを食べてきました。ですので，今，絶好調です。

そういったですね，それだけ胃に入りましたから，もう本当。汗が出てくる，暑いんですよ。暑いから汗，出てくるんですね。クールダウンしようと思ってアイスも買ったんですけども，で，ここへ持ってくるのに，また広いんですね，このキャンパスがね。迷ってしまいまして，２，３人の学生に聞いて，やっとここにたどり着いたんですけど，で，今度，２階に上がって部屋に入ろうとしたら，今度，鍵がかかって中に入れません。で，何かあったら携帯でってことを言われたんですけども，携帯電話は部屋の中にあったもので，もう音信不通だったんですけど。

ここでまた，アイスは溶けてくるしね，もう廊下あちこちうろうろしたら，ようやく，秋田というと，私の世代だと桜田淳子さんって知ってます。桜田淳子さん。知らないですか。もう結構 60 過ぎですね。昔，アイドルだったんですよね，歌手で。山口百恵さんとかと一緒で。その桜田淳子さんとかだと，秋田美人ってよく言いましたよね。まさしく廊下を歩いてましたら，部屋の一室がぱっとあきまして，学生さんだと思うんですけど，本当に秋田美人が出てきました。その方に恐る恐る声をかけまして，その部屋の名前を覚えていなかったので，特徴の，壁に何か就職のあれが張ってあった部屋だってことを言ったら，一緒になって駆け足で探してくれまして，やっとたどり着きまして，部屋も入れまして，で，アイスはもうドロドロでしたね，もうね。だけど，食べやすかったです。

そうした中で，今日，この講話時間を迎えることができました。本当にこうやって時間を頂くのは，関東では，この広島っていう話題は本当に乏しいです。あんまし関心がないってことです。こういった場所でお話しできること自体が，非常に私，本当うれしく思っております。私も３年間，広島に通いまして，いろんな被爆者の方とお会いしまして，いろんなお話を聞きました。やはりニュース，メディアでは取り上げられない生の声を聞くと，え，こんなこともあったのかということを驚かされる場面が多々ありました。今日はそういったことを限られた時間ではありますけども，皆さんにそのままストレートにお伝えしたいと思っております。

その中では，言葉では伝わらない部分がまたありますので，それは，こちら PowerPoint を通じまして，写真とか絵を見てもらいます。中にはひどい写真も出てきます。決して，★★ですから，無理して見ないでください。と言いますと，皆さん，見るんです。これが，どうしても本当にそうなんです。ぜひ見てください。

ぜひ，夏休み，これから迎えますけど，予定のない方は，今日，来ている長崎のほうにも資料館がありますし，広島にも資料館があります。ぜひ，皆さん，自分の足で行って，自分の目で，被爆者のお話を聞いたり，遺品を見て，ぜひ何か感じ取っていただきたいなと思っております。

それでは，入りたいと思います。で，今日，ちょっといろいろ持ってきましたので，後でお見せします。途中で，話が一方的になってしまうので，ちょっと名前を聞いてないので，ちょっと目と目が合った人に，聞くときありますので，そのときはよろしくお願いしますね。決して難しいことは聞きませんので。皆さん，頭いいのでね。

１．「被爆体験伝承者」とは，今日の話の構成（1 分 36 秒，590 文字）

今日，お話しする内容は，まず，被爆体験伝承者って何ぞと思ったと思いますんで，それからやります。

これを，読みますと，被爆者の平均年齢は 82.6 歳になりました。平成 30 年３月現在の数字です。ここにありますように，高齢化が進んで被爆体験を話される方が年々少なくなってきています。被爆者から体験や平和への思いを受け継ぎ，これを語り継いでいくことが必要となり，2012 年，平成 24 年，広島市が被爆体験伝承者を養成する取り組みを始めました。３年間，広島での研修を経て，現在，広島県を中心に関西，関東地方在住者で総勢 117 名がボランティ

Akita University

アとしてこのような活動をしております。これが被爆体験伝承者のちょっとした説明です。

今日は，こういった内容で話していきます。まず最初に，被爆による広島の実相。２番目に，被爆者，細川浩史さんの体験。それで３番目に，被爆者に対する差別といじめ。この３点を話していきます。

ちょっとちっちゃい字で申しわけないんですけども，どうかこれをお願いしたいんですけども，これに書いてあるように，遠い昔のことだから，もう終わったことだから私たちには関係ないと思うのではなく，今の時代と戦争をしていた昭和の時代とを比較していただいて，いかに平和な時代が大切かを感じ取ってください，そして，これがもし私だったらと，どうか自分に置きかえてみて話を聞きながらスライドを見てください。よろしくお願いします。

２．被爆の実相（10分２秒，3,330文字）

では，まず最初に，ちょっとしたクイズから入りたいと思います。これが，今現在の広島記念平和公園です。奥に原爆ドームが写っています。ここに赤字がありますように，広島平和記念公園ができる前，この場所に何があったと思いますかということで，必ず私，小学校，中学校，高校へ行くと，これからまず入っていきます。

皆さん，でも，わかると思いますけども，答えを４つ用意しました。公園ができる前，１番目，大きな病院があったと思う方，いらっしゃいますか。思いっきり手を挙げて，思いっきり。はい，ありがとうございます。

２番目，いや，ここと同じように，ここ，すごい広い大学のキャンパスがあったんだと思う方。いらっしゃいませんね。

３番目，いや，ここには町があったんだよと思う方。はい，ありがとうございます。

４番目，いや，ここはこれができる前はただの更地，空き地だったんだと思う方。あ，いらっしゃいますね。

自分の挙げた番号を，後で覚えておいてください。当たっても何も出ませんけど，それだけご勘弁お願いします。

あと，この中で，昔，広島に行ったことがある方っていらっしゃいますか。それ，行かれました。

○男　行きました。

○石綿　じゃあ，ある程度わかりますね。後で聞きますから。

あと，広島に住んだことがあるという方。は，いませんね。わかりました，はい。

じゃ，この流れで進んでまいります。よろしくお願いいたします。

1941年12月，日本とアメリカの間で戦争が始まりました。その４年後，日本は世界で唯一の戦争被爆国となりました。この日本に２種類の原子爆弾が，予告もなく広島と長崎に落とされました。

1945年，昭和20年８月６日，月曜日，午前８時15分，広島ですね。アメリカのB29型機の爆撃機は，広島市の北東方向から侵入し，現在のJR広島駅付近の上空9,600メートルの高さから，目標地点である市内中心部にあるアルファベットのＴの字をした相生橋を目標に，長さ約３メートル，直径約0.7メートル，重さ４トンの細長い形をした原子爆弾を，世界で初めて，人類の頭上に落としました。

こちらが写真です。皆さんから向かって左側が落とされる前の写真になります。右側が落とされた後の写真です。今言ったＴの字というのは，ここですね。アルファベットのＴ。この青い旗印のところが，アメリカ軍の爆弾を落とす目標地点だったと言っています。ここには写っていませんけど，現在のJR広島駅というのは，大体位置的にこの辺になります。

で，爆撃機が飛ぶ前に，まず観測機というのが飛びました，３機ほど。当日の天候調査として，先に飛び立ちまして，広島と長崎と★★小倉のほうに天候調査の飛行機が向かいました。ただ，報告されたことは，次のようになっています。その３点の地点に行きましたけども，結果的に広島が快晴で，爆弾の落とすには絶好のいい日だっていうことで，このとき運命が決まって，広島に落とされました。

実際，広島市の上空から落とした爆弾は，当日の天候，風向きを考慮した結果，そこがいいということで落としたんですけども，実際には，ここに落とす目標だったのが，実際には，この赤い，こちらの上空で爆発しました。この時点で約300メーターです。この黄色いのは，今の原爆ドームです。ですから，300メートルと，ほぼ成功に近い形で終わったと報告されました。

その赤い印のところには，昔，島病院ってありましたけど，今でもお孫さんが継いで，その島病院という病院が今でもあります。その上空で炸裂しました。

この600メートルという数字なんですけれども，皆さん，行ったことあると思いますけれども，どのぐらいだと思

Akita University

いますか，高さ的に。建物があるんですけども，600 メートルという。さっき黒酢飲んでるお兄さんいますよね。

○男　はい。

○石綿　600 メートルの高さ。

○男　スカイツリーの。

○石綿　そうです。東京スカイツリー，あそこの高さが 634 メーターあります。ですから，あれとほぼ同等の高さの位置で，広島の爆弾が炸裂したっていうことになります。

広島に落とされた爆弾が，こちらになりますね。通称リトルボーイといいます。長崎はファットマンと言われますね。こちらにも書いてありますように，長さ約 3 メーター，重さ 4 トン，直径約 0.7 メーターという爆弾でした。なぜリトルボーイかといいますと，ちょっとこぢんまりした形なんで，リトルボーイですね。長崎のはちょっとずんぐりむっくりで太ってるので，ファットマンとなっております。後にご説明があると思いますけど，私はちょっと★★ますので，ご説明します。こういった爆弾が広島に落とされました。

原子爆弾の威力なんですけども，地上から 600 メートルの高さで，目もくらむような閃光を放って炸裂し，小型の太陽ともいえる灼熱の火の球，火球をつくりました。この火球の中心温度は摂氏数百万度で，0.2 秒後には，直径 400 メートルの大きさとなって，爆心地周辺の地表温度は 3,000 から 4,000 度にも達したそうです。

そして，爆発した爆弾の中から，こちらのように，爆風，熱線，放射線が放出され，この三つが複雑に作用して，大変大きな被害をもたらしました。

まず最初に爆風です。こちら，原子爆弾の爆発の瞬間，気圧点は数十万気圧という超高圧となり，周りの空気が急激に膨張して衝撃波が発生し，その後を追って強烈な爆風が吹き抜けていきました。衝撃波は爆発の約 10 秒後には，約 3.7 キロメートルまで達し，その圧力は爆心地から 500 メートルのところで，１平方メートル当たり 19 トンに達するという大変巨大なものでした。

爆風がおさまると，中心部の空気が薄くなりまして，希薄になりまして，周辺部から爆発点に向かって吹き戻しがありました。

そして，こちらですね。ちょっと見にくいんですけど，これが広島の昔の地図なんですけども，この矢印が赤いのが爆心地ですね。島病院の上空のとこです。爆心地から２キロメートル以内の地域は焼失，着ていた洋服は自然に火がつき，着火して燃えたそうです。強烈な熱線によって焼かれた人々は，重度のやけどを負い，死亡。３キロメートル以内では，これも自然着火で，電信柱や樹木が黒焦げとなって燃えました。

次，放射線です。これが一番厄介だったんですね，今回。放射線，この目に見えない放射線が一番怖い。人体に大変深刻な障害を残しました。原子爆弾の最大の特徴は放射線が放出されること。放射線は，人体の奥深くまで入り込んで細胞を破壊し，血液を変質させ，骨髄などの造血機能を破壊し，肺や肝臓などの内臓を侵し，深刻な障害を引き起こしました。

爆心地から１キロメートル以内にいた人々は，多くの人は★★して死亡しました。被爆後，月日が経過してから発病して死亡した例も数多くありました。そして，被爆直後から短期間の急性障害として，まず，吐き気，食欲不振，下痢，頭痛，脱毛，吐血，白血球や赤血球の減少などの症状が次々とあらわれました。

1955 年ごろから，こういう報告がありました。がんの発生率が異常に高くなったということですね。一つのみならず，甲状腺がん，乳がんとかで，次から次へとがんが発生するという，そういう被爆者が数多く出たそうです。

このような，一番厄介な放射線，放射線がこのように年月を経て，どのような影響を引き起こすのか，現在もまだ解明されておらず，調査や研究がこんにちも続けられています。

この年，当時，広島市内には 35 万人いたと言われております。その年に亡くなった人の数が 14 万人という数字です。35 万人いた人が，その年の暮れには 14 万人の方が，命が消えていきました。この数字からわかるように，いかにすさまじい破壊力のあった原子爆弾かと感じることができるかと思います。

そして，生き残った後も，原爆症や差別による苦しみは続き，現在もなお，日本国内，海外の被害者やその遺族の方々は，癒えることのない傷跡とともに生きられています。

こんな感じですね。

Akita University

平田さんでしたっけ。お名前，平田さんでしたっけ。

○浜田　浜田です。

○石綿　浜田さん，ごめんなさい。どうですか，この爆弾，聞いて。いろいろ勉強されたとは思いますけども。

○浜田　★★落とされたら，逃げようがないなと思いました。

○石綿　そうですね。もしやっぱ，落っこったら怖いですよ，やっぱりね。

３．被爆者，細川浩史さんの体験①（5分49秒，1,869文字）

では，続きまして，こちら，細川浩史さん，今91歳になります。私はこの方，細川浩史さんの被爆体験を伝承しました。今から，この細川浩史さんの被爆体験のお話を入りたいと思います。

当時，被爆した当時は17歳の少年でした。細川さんは，少年時代に受けたつらくて悲しい被爆体験を，国内外から広島を訪れる方々に，現在も語りを続けておられます。それはなぜかといいますと，日本のみならず世界が平和であってほしいとの願い，そして，若い皆さんと同じように，自分と同じような苦しみや悲しみ，そしてあのつらい気持ちを経験させたくないと，強い思いを願っているからなのです。

細川さんは，あの73年前の８月６日のことを，昨日のことのように私たちに話しかけてくれました。あの８月６日，月曜日は，朝からいい天気で，いつもと変わらない暑い日だったと。多くの広島市民は，勤め人は会社へと向かい，子供たちは学校へ，主婦は家の仕事へと，それぞれの１日が始まっていました。

この細川さんは，お母さん，そして４歳下の，当時13歳の中学生の妹，瑤子さんと，宮島という地に住んでいました。お父さんは戦地に行っていたものですから，家族３人で暮らしていました。

当日，1945年８月６日，まず，妹の瑤子さんが，お母さんにつくってもらったお弁当を持って，行ってきますと元気な声で挨拶をして，学校へと向かいました。その後に，細川さんも職場へと向かいました。

職場はこちらになります。広島逓信局といいます。向かって左側が被爆前，右側が被爆後です。逓信局と聞いて，わかる方，いらっしゃいますかね。目の前の，白い上着着てる。今でいうと何の会社でしょう，逓信局。

○男　テレビ局。

○石綿　思ったことを言ってください。

○男　テレビ局だと。

○石綿　はい。あと，ほかに。そのアディダスの。逓信局。

○男　新聞ですか。

○石綿　新聞。新聞社だった。はい。

逓信局というのは，今でいいますと郵便局とNTT，これをいいます。通信の事業と郵便の事業をやってたとこです，逓信局といいます。

細川さんは，この建物の４階の１室にいました，あの時間。で，細川さんは，この建物が爆心地から1.3キロメートルの地点にありました。現在も違う形として，今，建っております。で，時計の針が★★と，刻々と過ぎ，運命の８時15分を迎えました。４階の職場で仕事について，取りかかっていると，突然，強烈な閃光がぴかっと光りました。

強烈と言われたので，私，どのくらいだろうって聞いてみましたら，こういう答えがありました。よくテレビなんか見ますと，カメラのフラッシュがたかれますね，★★相手方にぴかぴかと。ああいう感じの，もと数百倍と言っていましたが，あんな感じの光り方だという証言されてました。あの感じが光ったと。

で，その後に，光った瞬間，その後に何があったかといいますと，しゅっという大変大きな音と，異常な大きな爆

Akita University

風で，体が５メーターから６メーターほど吹き飛ばされてしまい，その場で気を失って，失神してしまったそうです。

やがて意識が戻って，細川さんは，ああ，自分は助かったんだとわかり，一体今，何が起こったんだと思ったそうです。

細川さんもそうでしたが，ほとんどの被爆者の方は，あの原子爆弾を，みんなこう言います。自分に向かって落ちてきたと。自分に向かって落ちた爆弾だと，こういうように今でも証言されています。それほど大変威力のあった爆弾だったということですね。

幸いにも，この細川さん，机の位置が大きな柱の陰にあったので，熱線が遮られ，やけどは免れました。しかし，近くの窓ガラスが爆風で粉々に砕けて，細川さんの体に突き刺さってしまいました。着ていた衣服は見る見るうちに血で赤く染まってしまいました。先ほどまで会話をしていた同僚たちは，全身を強く打って，血まみれになった人や即死した人が数多くいました。

意識が戻った細川さん，立ち上がって，同僚と近くの河原へと避難しました。建物から外に出ると，いつもの見なれた町並みではなく，変わり果てた広島の町がそこにありました。上空からの爆風によって，木造住宅がつぶされて，住宅の下敷きとなった人たちが，助けて，ここから出して，ねえ，お願いと救いを求める声が中から聞こえてくるのです。助けてあげたかったのですが，助ける力はなく，もう逃げるので精いっぱいだった。自分のことで精いっぱいだったということですね。

ようやく河原に着いた細川さんと同僚が見た光景は，大やけどした兵士や，近くの場所で建物疎開の作業をしていて大やけどをした学徒動員の中学１，２年生の少年，少女たちでした。

４．被爆絵の説明と学徒動員，建物疎開について（３分３秒，1,105 文字）

この絵は，今，広島県立基町高校という学校があるんですけど，そちらの美術部の生徒が，被爆者の証言をもとに描き上げた絵なんですけども，大変，この色，いろんな色ありますけど，色を出すのにすごい苦労だっていうことを，なんか言っておられました，生徒さんのほうが。で，これを描き上げることによって，すごいやっぱりいろんな葛藤があるわけなんですけども，これが資料館の中にも数多く並んでいまして，今年も８月７日の日に，また新しい絵がまた並ぶと思うんですけども，こういった活動を基町高校の美術部はやっております。

これも，下敷きになってご婦人が，逃げ惑う少年さんの足首を捕まえて，助けてとお願いするんだけれども，少年はもう自分のことで精いっぱいだと。これをほどいて，手を合わせて，堪忍して，ごめんなさいと謝って逃げてくる場面の一つだということですね。

学徒動員という言葉，わかる方，いらっしゃいますか。★★白いシャツの方学徒動員って。

○男　学生が働く。

○石綿　そうですね。昔，大人たちは，もう戦場に送られていますから，大人がいないわけですね。そうすると，当時，学校の生徒だった少年，少女たちが，学校にも行かず，こういった工場に行って，戦争で使う機械をつくっていた日々が続くわけですね。

着ていた洋服も，こんなような格好で工場に行くわけですね。女の子を見ますと，額に鉢巻きして，真ん中に日の丸のマークをつけて工場に行くわけですね。こんな 73 年前の広島の町でしたね。

そして，建物疎開って，次に出てくるんですけども，こちらは建物疎開の説明の絵になります。建物疎開というのは，なぜこういうことをするかといいますと，爆弾が落ちますと，まず火がおこります。そうすると，燃え広がらないようにということで，こういった建物を壊していくんです。そうして広大な空き地をつくることによって燃えるものが何もありませんから，空き地をつくって，こういった建物疎開って，★★行くんです。

この絵を見ますと，この住居，普通の住人が先ほどまで住んでいた家です。で，こちらに大人が数人，ロープをかけて，いわゆる綱引きみたいなもんですね。ああいうイメージで引っ張るんです。で，★★コツさえあれば，★★簡単に壊れる家がいっぱいあったそうです。★★引っ張って，★★つぶれかけてきます。そして，つぶれかけた家の後の整理をする，この瓦ですね。瓦をやるのが，この女学生たちの仕事だったんです。こういった作業をすることが建物疎開といいます。

この子たちは，ぐあい悪くて休んでいる感じですね。これ，学校の，多分，先生だと思うんですけども。こういった感じで建物疎開という作業が毎日，炎天下の中で行われていました。

Akita University

5．被爆者，細川浩史さんの体験②（48秒，285文字）

話，戻りますけど，先ほどの細川さん，河原にいた少年たちは，隠れる場所のない炎天下の路上で建物疎開作業をしていたときに，強烈な熱線，爆風，放射線を浴びてしまったのです。喉が渇くので，水をください，水をくださいと，かすれた声で求めてくるのですが，やけどの重傷者に水を飲ませたらすぐに死ぬと，当時は大変厳しく教えられていたので，与えませんでした。しかし，水を飲んでも，飲まなくても，みんな死んでいったのです。今思うと，わずか一滴の水でも，あのときに飲ませてあげればよかったなと，細川さんは，73年たった今でも，あの少年たちに申しわけない気持ちで，ごめんねと深く後悔されています。

6．被爆者の様々な様子（4分7秒，1,254文字）

原爆投下後の広島には，このほかにもさまざまな被害者の姿がありました。乗客が乗った丸焦げの脱線した電車。

頭髪はちりちりに焼けて，着ていた衣服は焼け焦げてしまって，皮膚はだらっと垂れ下がり，両手を前に出して，まるで幽霊のようにさまよい歩いている人。

全身にガラスが突き刺さっている人，こんな感じですね。

これ，ちょっと★★なんですけども，これ見たらわかると思うんですけども，ちょっと私，これ考えたんですけどね，いいのあったんですよね。これ，皮膚がありますよね。やけどしてますから，皮膚が垂れ下がっちゃって，だらーと。この皮膚が，下の，これは実際，中には地面まで垂れ下がって，こうやって前に出して，こうやって避難していく被爆者が，ぞろぞろぞろぞろと行くわけですよね，こういう感じで。

こういった光景もあれば，もっとひどいのが，私もびっくりしたんですけども，自分の目の玉，目の玉が飛び出してしまって，自分の手のひらに目の玉を置いて，こうやって逃げる人もいたということです。

あと，内臓が飛び出してしまった人。本当に想像を絶するような光景が目の前に広がっていたんですね。

こちら，少年は，もう本当に★★ように，洋服は焼けただれ，足はやけどして，皮膚も，腕の皮膚は垂れ下がって，顔もやけどで，頭の毛もちりちりに燃えちゃってる姿ですね。

こちらの写真は，お母さんと赤ちゃんなんですけども，お母さんも血を流して重症なんですけども，ただ，残念なことに，この赤ちゃんは既に死んでありました。だけど，このお母さんは，我が子の死を現実として受け入れられなくて，起きて，起きてと，今でも，起こしているところ，一コマの絵だったそうなんですけどね，こういった光景があったそうです。

その上，焼け跡には，道路には，黒焦げの炭化した遺体や，体が膨れ上がってしまい，性別不明の焼死体がたくさん転がっていました。かつて，広島平和記念資料館には，こういったジオラマがありました。逃げる被爆者の人の証言をもとに広島市が，こういったろう人形をつくったんですけども，私も最初これを見たときは，すごい，私はちょっと低い身長の人形だったんですけど，こうやって顔をのぞき込んだんですけども，後ろの光景，火が迫ってくる光景だったんですけども，かなりすごいなっていう感じで見て，帰ってきたんですけども，これを見て，★★そのときにいました細川さんに話ししましたら，こう言われました。あんなのはつくりもんだと言われました。実際はあんなきれいなもんじゃなかったと。皆さん，顔見てください。結構きれいですよね。実際は，顔なんていう顔じゃなかったと。あんなのつくりもんだと，一喝されました，私。そして，こう言われました。広島弁で，あげんな，あがいなもんじゃないけのう。あれはきれいなほうよと。こちらの言葉で言い直すと，あんなものではない。あれはきれいなほうです。あれじゃあ，ほんまのおどろしさは伝わりゃあせんよ。あんなもんでは，原爆の恐ろしさは伝わらないよと，私にこういう言葉を投げつけました。

7．被爆者，細川浩史さんの体験③（29秒，361文字）

細川さんの話に戻りますけど，同僚宅に泊まった細川さん，翌日，血に染まった衣服から，同僚のお父さんから，衣服を着がえて，おにぎり一つを持って，20キロメートル先の宮島にある自宅へと歩き始めました。

町はこんな感じだったそうです。町は，不気味なほどしーんと静かで，地面はまだ熱が残っていて熱かったそうです。爆風で，風で壊れた家の下敷きとなった人が，生きたままの状態で，家と一緒に焼け死んでいます。場所によっては，まだかすかに煙がくすぶっているところもありました。宮島の自宅に帰る道で，17歳の少年の目に入ってきたものは地獄そのものでした。

途中，妹，瑤子さんのことが気になり，どこかで元気で生きていてほしいと願っていました。ようやくたどり着いた自宅には誰もいませんでした。瑤子さんはどうだったのでしょうか。振り返ってみたいと思います。

Akita University

８．妹瑤子さんの日記と被爆（17 分 12 秒，5,830 文字）

きのうの朝，お弁当を持って元気な声で，行っていますと学校へ向かいました瑤子さん，当時，広島に住んでいる女の子の子供たちが憧れていた学校の一つである広島県立広島第一高等女学校の１年生でした。あの８月６日は学徒動員で野外作業となる初めての建物疎開作業の初日で，県立広島第一高等女学校の作業場は，爆心地から 800 メートルの位置でした。この女学校は，★★から，生徒に日記を書くことを課していました。前日の８月５日に書いた，夜に書いた日記は，次のことが書かれていました。

妹，瑤子さんは，こういう子です。当時，これは 11 歳のときの写真ですね。こちらが細川さんの妹の瑤子さんです。今，生きておられたら，多分 86，そのぐらいだと思いますね。結構かわいい，結構って失礼ですけど，かわいい顔してますよね。

こちらが，この瑤子さんが書いた日記帳の中身です。ずっと左から書いてきまして，８月５日と来ました。生きているんであれば，８月５日，６，７，８と続いてきますが，８月５日で終わっています。内容を音読しますので，聞いてください。

〇テープ音声　８月５日，日曜日，晴。学校。家庭修練日。家庭。起床６時。就床 21 時。学習時間１時間 30 分。手伝い，食事の支度。今日は家庭修練日である。きのう，おじが来たので家が大変にぎやかであった。いつもこんなだったらいいなあと思う。あしたからは家屋疎開の整理だ。一生懸命頑張ろうと思う。

〇石綿　こちらが，８月５日，最後の日となった内容です。こちらに書いてあります，上の家庭修練日，これは何を意味するかといいますと，当時，学校側としましては，空襲警報がぶーとか鳴りますと，生徒の安全第一を考えますので，休校，学校がお休みとなりました。そうすると，家庭修練日というふうに変わりまして，何をするかといいますと，家のお手伝いをしなさいということで，家庭修練日となりました。

この日を見ますと，６時には起床して，夜９時に寝たと書いてあります。そして，いつもこんな，この時代，戦争，戦争で嫌だったけれど，きのうはおじが遊びにきて，大変にぎやかだったと。いつもこんなだったらいいなと思うと書かれています。最後には，後ろの場面では，あしたから家屋疎開の整理だ。一生懸命頑張ろうと思うと，あしたへ向かっての決意文というか，そういった気持ちが最後の締めとして書かれております。

この日記帳を書いたのは，当時，万年筆で瑤子さんは書いていました。これはお兄さんの細川浩史さんですが，以前，私，この伝承者という資格を得まして，この万年筆を，ぜひ学校に持ち込んで生徒さんに見てもらいたいなと思って，ある日，一つお願いをしました。それはこういうことです。だめもとでお願いしたんですけども，こう言いました。この万年筆を，ぜひ生徒さんに見せたいので，貸してくれないかという申し出をしました。すると，細川さん，こう言われました。これはそのときの写真です。ちょっとしばらく黙っていまして，こうやって万年筆を眺めて，長い間，すごい沈黙が続きまして，ようやく開いた言葉は次のことでした。

石綿さん，この万年筆は，あの日から 73 年間，一度も私から離れてないんよ。石綿さんの気持ちは大変うれしい。だけど，事情をわかってほしいと言われました。

私は，予想していたとおりの言葉でした。人から見れば，ごく普通の黒い万年筆です。しかし，遺族にとっては形見，かわいい，あの 13 歳の妹，瑤子さんなんですね。今日は，その理由で本物はお見せできませんが，このようにカメラにおさめてきましたので，見てください。

下の写真を見ますと，ペン先に黒いインクの跡が今でも残っています。これが８月５日の日記を書いたインクの跡っていうことですね。

先ほど，２時ごろ，時間があったので，ここから広島まで電話しまして，細川さんと電話しました。今回，広島記念資料館，リニューアルオープンをしまして，展示物が一新されました。その中で，地下の資料館のほうへ入っていきますと，入り口の真っ正面に，この妹，瑤子さんの遺品がいっぱい飾ってありました。焼けた学生服，身分証明書，お弁当箱，お箸，あと救命袋，あと，先ほど見せた写真が飾られていました。

ただ，この日記帳と万年筆に関しましては，ありませんでした。その点を，先ほど１時間ほど前に広島に電話して聞きましたら，こういう答えが返ってきました。あれは，さすがに万年筆と日記帳は，私からはまだ離せられないと。あれは魂になっているとおっしゃっていました。そういうことですね。91 歳になりましたので，私の時も残り少ないと思うけれども，もうしばらく私のそばに置いておきたいんやって言っていました。そういうお話でした。

妹，瑤子さんは憧れの女学校に入学して，希望に満ちて，何事も前向きに考えて行動していました。瑤子さんたち

Akita University

の学校が行う建物疎開の作業は，壊した家の瓦を整理することでした。学校の先生に指示された場所に集合して，後片づけ作業が始まります。もちろん８月の炎天下の中の作業です。全員このように２列に並んで，リレー式で瓦を手から手へと渡していきます。大変長時間の作業です。私は，少女たちの手に持った瓦はさぞかし重かったのではないかと思いました。

そして，後で聞いた話ですが，少しでも楽しく作業ができればと考えたのが，彼女たちがこう考えたそうです。瓦を次の子に渡すときに，当時，食べることができなかったお菓子に見立てて，笑顔で，次はシュークリームよ。早く受け取って。はい。次はカステラ。今度はようかんよというぐあいに，瓦をお菓子に見立てて，工夫して楽しく作業をすることでした。勉強もしたいと思う女学生たちは，勉強もできずに，ただお国のためにひたすら戦争の勝利を信じて，皆，このように必死の思いで頑張っていた時代だったのです。

やがて，瑤子さんを初めとする中学生たちは，運命の午前８時15分を迎えてしまいました。建物疎開作業では，県立広島第一高等女学校だけでも，動員されていた１年生で223名と引率の先生５人，合わせて228名が死亡しました。この日，市内の別の場所でも作業をしていた国民学校高等科，中学校，高等女学校の生徒約6,300名も同じく死亡しました。

瑤子さんは大やけどで重体，瀕死の状態で逃げました。途中には，勢いよく流れる大きな川が幾つもあります。この川を渡り切れないと，宮島の自宅には帰れません。しかし，人が通れる橋は既に燃えて通ることができません。周りにある，今で広島電鉄ですね，広島電鉄の電車の橋を渡って逃げるわけです。その橋も当時は木製ですので，焼けて壊れている中を逃げるわけですね。

これですね。今でも停留所がありますけれども，天満橋という橋です。左が昔で，右が現在の橋ですね。この左側の橋，この橋を，結構川幅も長いんですけども，この橋を，もちろんもう壊れかけていますから，川に落ちないように，２本足で歩けませんから，犬と猫のように四つん這いになりながら，こういった感じで渡り切ったということですね。で，下を見ますと，川が流れていまして，右から左へと焼け死んだ人たち，死体が流れていく光景が目に入ってくるんだけれども，自分も川に落ちないように，やけどしているんだけども，落ちないようにしっかり捕まえながら，最後の力を振り絞って，この川を渡り切ったということですね。

で，渡り切った瑤子さん，途中で休んでいると，運よく日本軍の救援車，トラックに拾われたそうです。そのトラックに乗せられた瑤子さん，お昼ごろ，救護所へ運び込まれました。救護所といいましても，病院とかお医者さん，看護師さんも爆弾で死んでますんで，救護所というのは言葉だけの救護所で，どういうところに入ったかといいますと，小学校とか中学校の理科の教室，そこが救護所と与えられまして，床にちょっとしたござを敷かれまして，そこに負傷者が運び込まれて，そこで寝かされてるっていう状態です。

こんな感じでした。これが当時の救護所ですね。もちろん薬も何もないときです。で，皆さん，まだこのとき，あの爆弾が原子爆弾とは，みんな認知，知りませんでしたから，ましてや放射線なんて聞いたことのない言葉ですから，もうとにかくみんな大やけどで大変だったということで，暑いさなか，８月ですから，もう傷口にはハエが飛んできて，非常に悪い環境下の中で，あとは死を待つだけだったということですね，薬もないわけですから。

だから，こういった，上の方がお水とかも差し伸べるんだけども，飲みたいんだけども，飲める気力もなかったという，そういう感じだったそうですね。もちろんクーラーはないし，本当に暑い，風もない救護所の中での救護活動だったということですね。

ちょっと写真を幾つか見せますけど，これは男性の方ですけど，顔にやけどして，腕もちょっと燃えてますね。

次の写真は，男性ですけど，上半身，下半身，焼けただれてますけど，なぜか真ん中はきれいな肌です。どうしてだと思いますか。その紺のシャツの方。

○男　★★手すりか何かで遮られたのかなと。

○石綿　なるほど。これ，私も聞きましたら，腹巻をしたっていうんですよね。腹巻をしてたために，こうなったんだ，きれいだったんだっていうことだったんです。だから，たった１枚の洋服だけで，こんなにも変わるんだなっていうことを聞かされました。

これは瑤子さんの着ていた学生服だったんですね。こういうふうな感じで焼けてしまったということですね。

で，救護所に入った瑤子さん，そこでこの左側の女性，ウエダハツエさんといいます。もう亡くなられた女性ですが，このウエダハツエさんが，当日，お昼から亡くなられるまで，１人でこのご婦人の方が瑤子さんを看病したそうです。

Akita University

それで，細川さんの若いときなんですけども，いろいろ聞きましたら，こう言われたそうです。まず，見た瞬間，もう瑤子さんは無理だろうということで，このご婦人は思ったそうです。ならば，どうしようかと考えたことが，こういうことでした。何とか生きてる状態でお母さんに会わせてあげようということだけだったそうです。そういうことで，瑤子さんも，かすれた声で，このご婦人に幾つかの言葉を投げかけました。おかあちゃん，まだ来てないんと何度も何度も聞いたそうです。すると，この女性はこう言ったそうです。もうすぐ来るよ。もうすぐよ。しっかりしてなさいね。我慢してねと，何度も何度も，この★★そうです。

ただ，実際には，この救護所に瑤子さんが入ったということは，お母さんの耳には届いていません。だけど，この女性は，先ほどもお話ししたように，何とか生きた状態で母と子を会わせてあげたいという一心で，この言葉で瑤子さんを励ましたということなんですね。

その言葉の中で，途中途中に，瑤子さん，喉が渇いて，お水をちょうだい，お水をちょうだい。背中をなでて。お背中をなでて。お水をちょうだいと，こういうことがずっと続いたそうです。だけど，お水をあげたら死んでしまうので，飲ませられなかったと言っていたそうです。

そして，幾つかの言葉が続いた中，時も，朝方，被爆した瑤子さん，昼に入った救護所，そして夕方，夜と時間が流れていくわけですけども，だんだんその時が，8時，9時になった時点で，とうとう瑤子さんも自分の運命を感じたんだと思いますね，こういう言葉をこのご婦人の投げたそうです。それは，おばちゃん，手を握らせてと。おばちゃん，手を握らせて。このように言ったそうです。皆さんはこの言葉を聞いて，どう思いますかね。お兄さん。

○男　そうですね。お母さんを待ってたんだけど，多分，もう自分の命も短いし，お母さんのかわりとして手を握ってもらおうと。

○石綿　そうですね，やっぱりそう思いますよね。私もそう思ったんですけど，細川さんも同意見でした。まさしくこのご婦人も，そう言われたそうです。ね，おばちゃん，手を握らせて。これが最後の言葉となってしまったんですけども，それを聞いて，このおばさんは手を差し伸べて，瑤子さんも残された力でぎゅっと握って息を引き取ったそうです。時間にして，当日，8月6日の午後11時14分に永眠されました。

そして，お母さんはといいますと，翌日7日，ようやく役所からの連絡で，この救護所に駆けつけましたが，瑤子さんは既に冷たい体です。いくら問いかけても，答えは返ってきません。お母さんは号泣の状態です。だけど，この救護所にずっといられるわけではありませんから，お母さんは，大八車という車をご近所の方にお借りして，宮島に瑤子さんを乗せて帰りました。

これが，昔，大八車といったそうです。近所の方にこの車を借りて，遺体を乗せて，後ろから押して，宮島のうちに帰っていったそうです。ようやく大好きなお母さんと一緒になれましたが，無言の帰宅となった瑤子さんです。

戦争で犠牲となった方々は，このように何の罪もない一般の人たちまで，将来のある若者たちまでが巻き込まれてしまったのです。これが現実なのです。

このような残酷な出来事を，私，自分の身に置きかえて考えてみました。すると，やっぱし傍観者ではいられない。まさに，この悲しい気持ちを今，被爆体験伝承者として，多くの方に語ることが大切だと強く感じた瞬間でもありました。

あのとき17歳だった細川さんは，現在91歳となり，お孫さん，ひ孫さんがいる，大変元気なおじいちゃんです。そして，毎年めぐって来る8月6日は，ある物を持って，ある場所へと向かいます。それは何だと思いますか。こちらです。この森永のキャラメルです。当日の朝というか，前日の日に，この森永のキャラメルを一つ購入しまして，先ほどの天満橋，あちらのほうに向かいます。今でこそスーパーとかコンビニに行けば，百何ぼで買えるキャラメルですけども，当時はこれですら食べれなかった時代だったんですね。このキャラメルを購入して，細川さんは，あの天満橋の傍らに立ち，一つ一つキャラメルの包装紙を取り除いて，川に投げ込んでいます。その思いを聞いてみますと，今年も流すから食べてねと，キャラメルを川に流してお祈りを捧げます。

戦争によって，満足に勉強もできなかった。何も楽しい経験ができなかった。おいしいものも食べることができなかった妹，瑤子さんだけではなくて，亡くなった多くの少年，少女たちを思い浮かべながら，手を合わせています。

9．被爆者に対する差別といじめ（9分10秒，3,058文字）

そして，ここにもありますように，まとめみたいなんですけど，私もいろんな方の，今でも年に，先週も広島，用

Akita University

事があって行ってきましたけども，年に3，4回ほど，今でも広島に通って，被爆者の方とお会いして，被爆体験のお話を聞いています。私もいろんな被爆者の声，そして文献などを見まして，大体こんな感じだろうなということで，自分でまとめてみました。

原爆は，ここにも書いたように，体だけではなく心まで大きな傷をつけたということです。被爆者の心の負担として，まず，後悔と罪の意識。助けを求める生徒や肉親，子供を置き去りにして自分だけ生き残ってしまったという罪の意識。助ければよかったという後悔。実際には，そのようなことは不可能でありながらですね。

次に，被爆者ではないと偽って今の生活，生きている，生活している罪の意識。被爆者と名乗ったら，就職や結婚に支障があったんですね。特に女性は，男性もそうですけれども，女性なんかは，お見合いの話なんかが来ても，あの子は被爆者だからというと，その途端にもうその話はなくなってしまうということですね。今でも被爆者の方にはいますけれども，結婚を申し込んだけれども，あんた被爆者やろって一喝されて，相手の親から，それでもう話が流れちゃって，今でも独身でいる85歳の男性がいらっしゃいます。

限りない不安として，原爆症で死んでいく親類，知人を見て，いずれ自分も同じ結末で死んでいくという不安。結婚しても，子供に放射線の影響が出るかもしれないという不安があって，1975年，今から43年前，昭和50年ごろまでは，被爆者の間で自殺が多かったということを聞いています。

そして，あの場面からの逃避。あの悲惨な地獄絵を見た被爆者は，二度と同じような場面に遭遇したくないという気持ちで，心の壁をつくってしまいます。

ですから，被爆者もまた不思議なことに，自分の子供にはこういった自分の被爆体験というのは言わないんです，絶対言わないんですね。自分の子供には伝えなくて，なぜかお孫さんには話すんですね。これは本当に不思議なんです。今でも私も不思議に思っているんですけど，なぜか自分の我が子には被爆体験を伝えないで，自分の孫には被爆体験を伝えているという，こういう実情が，なんかあります。

このように，この心の壁を守ろうとして，今でも雷とか強い光に対する異常なほどの恐怖感，拒否感で，当時のことを思い出してしまい，他人に話すことへの拒否行動へと動いていくということです。

これも，助けてという，お母さんを助けてとお願いしていますけど，男性は，勘弁してやということで，手を合わせて，この場から去るだけですけども，こういった光景で，本当に，なぜ自分だけ生き残って，あのとき助けてあげなかったかという，こういう罪の意識だということですね。

これも，後ろから火が迫ってますけども，お嬢ちゃんはまだ生きてるんですね。ただ，手でだけでやって水をかけてあげてても，こんなにおさまる火の勢いじゃありません。だけど，せめてのことをやったということで，この男性は逃げていったということの絵です，これは。

こちらは，背中にできた女性のケロイドの写真です。

では，これは最後になりますけど，ある方のお話になりますけども，35万人みんなが同じ広島市内に，同じいた場所ではないので，被爆者の方は，見た光景がそれぞれ違いますから，光景が違います。熱線で顔とか腕が焼けて，このようにケロイドとなってしまい，治療も満足に受けられずに，若い女性は将来を悲観して，自ら命を絶ってしまう，自殺が多かったということですね。

ある方の女性のお話だったんですけども，路面電車に乗って，お母さんからお使いを頼まれて買い物に行きました。そして，買い物かごを横に置いて電車に座っていると，隣の電停，バスでいうとバス停ですね，そこから3，4人の少年たちが乗ってきたということです。そして，乗ってきて，彼女の顔を見た瞬間，大きな声でこう言ったそうです。わあ，お化けがおるわいと言ったそうです。顔を見て，お化けがおるわいって言ったそうです。それを言われたご本人の女性の方は，もう買い物どころじゃなくて，もう悲しくてつらくて，次の停留所で電車からおりてしまったそうです。そして，泣きながら，涙を流すのをこらえて，また電車に乗って家に帰っていくわけですけども，家に帰って，お母さんは，あら早いわねっていうことで言葉を投げかけたわけなんですけども，買って来たのと言ったら，もう黙って奥の部屋で号泣したそうです。そして，お母さんにこう言ったそうです。怖いな。こわんな顔しときゃあ，表を歩かにゃせんわい。うちの人生，もう終わったわ。こちらの言葉でいいますと，こんな顔じゃあ，表も歩けない。私の人生もう終わり。こういうふうに言ったそうです。

この方は，私にこう言われました。あのときは，アメリカが憎くて憎くて仕方がなかった。私の気持ちをどこにぶつけたらいいのかわからず，母親に八つ当たりをして，悩ましてしまったと。しかし，今では，そのケロイドも，完全ではありませんが，数回に及ぶ手術の結果，だいぶきれいな顔になりました。と私に，洋服をめくって見せてくれました。本当にきれいな肌でした。

Akita University

そして，続けてこう言いました。いつまでもアメリカを憎んでいたらだめだ。次世代の若者たちに，あの過ち，戦争を経験させないために，平和活動をしていこうと決意され，原爆の後遺症と闘いながら，★★証人活動を続けられていました。そして，過去は過去，今はとても幸せだよ。あのとき，私も悲観して自殺を考えたけど，生きていて本当によかったと語っていました。残念なことに，この方は昨年の３月に亡くなってしまいました。86 歳という生涯でした。

このように，言葉には，とても強い力があります。悪口やひどい言葉は，刃物で傷つけたと同じくらい相手の心に突き刺さってしまうことがあります。言葉の暴力を受けた人は，その場だけではおさまらず，場合によっては一生，その受けた言葉が心の中に残ってしまいます。

新聞，テレビやメディアで，中学生，高校生がいじめを受けて自殺するという報道が，また最近見るようになりました。自分がされたり，嫌なことは絶対他人にはしないということですね。そして，本当は自分はしたくないんだけども，横にいる友達と一緒になって歩調を合わせるために，やっぱ言いたくないんだけども，相手を傷つける言葉をつい言ってしまう。このような行為はいけないということで，どうか皆さんも理解していただきたいと思っています。

将来，皆さんなんか，教職員，目指している方が多いっていうことを聞いてますので，私の義理の弟も，岐阜のほうで高校の教師をやっているんですけども，いろいろ聞きますけど，学校は大変だと，教師は大変だと言っています。いろんなことがあるとはよく聞いていますけども，大変だと，私は今，言いましたけども，だけど，その大変だという中にも，すごいやっぱ生徒の成長が見られて，すごい楽しい時間もあるということを言ったんで，大変だけども，皆さんもぜひ教職のほうは目指していただいて，いい先生になっていただきたいと思います。

また，学校へ行って，現場で，さまざまなことを目にすると思います。どうか，この差別，いじめの問題に関しましては，見て見ぬふりはしないと思いますけども，生徒の心に寄り添って，何とか解決の糸口を探してあげて，生徒と一緒になって頑張ってもらいたいと思っております。

10．現在の広島（3 分 2 秒，1,163 文字）

先生，以上です。

一応，この流れで話を進めまして，短い時間というか，長い時間だと思いますけども，私の被爆体験伝承講話ということで，お話を終わらせていただきます。ありがとうございました。

それで，先ほど，皆さんに冒頭，お話ししました，あのクイズなんですけども，平和記念公園に何があったかといいますと，町があったんですね，町。当時，広島一の繁華街だったそうです。4,400 名の方が，あの中で生活をしていました。

今，資料館がリニューアル工事が終わったと言いましたけども，ついこの間の話です。2017 年の話です。今でこそ整地され，歩きやすい，緑の生い茂ったきれいな公園ですけども，３，４メーターほど軽く掘りますと，昔，73 年前の広島の生活が，このように普通に出てきます。何が出てくるかというと，しゃもじとか，あと牛乳屋さんの★★にあった牛乳びん，溶けた牛乳びんとか，いろんなものが出てきたそうです。

で，今でも人骨とか，普通に出てくるそうです。ですから，被爆者の方は，亡くなった遺族の方々は，骨が残っていない方が多々いらっしゃいます。そういう方は，よくこう言われます。なんか土足で亡くなった人たちの頭の上を歩かれているみたいで，すごいなんか複雑な気持ちだと言われます。このように，普通に掘ると，73 年前の広島が出てくるということですね。

今回の東日本大地震でもそうですけれども，向こうでも，土をかぶせて，今，整地してやっていますけど，やはりちょっとこれは，ちょっとした数年前の地震の生活が出てくるという，ちょっと共通した部分がありますけども，広島もこういった状況が今でもあるんですね。

で，今年は 74 回目の８月６日を，間もなく広島は迎えようとします。また，広島の８時 15 分に合わせて，平和祈念式典がありますけども，被爆者の方は，あの式典に参加することも，参加する方もいらっしゃれば，中には，あれはお祭りだと言って，参加しなくて，それぞれの思いの場所で手を合わせて祈りを捧げている被爆者も数多くいらっしゃいます。

ちなみに，吉川晃司さんって知ってます，芸能人の。知ってる方，いらっしゃいますか。あの方は，おじいちゃんが昔，平和記念公園の中で吉川旅館というのを経営してまして，途中で経営権がかわったんですけども，吉川晃司さんのお父さんが被爆２世なんですね。当時，まだ幼少時代でしたので，疎開してまして，被爆そのものはなく，直接被爆は免れたんですけども，後に帰ってきて，入市被曝ということで放射線を浴びてしまったんですけども，吉川晃

Akita University

司さんはそう言ってみたら被爆３世だったんですね。当時，おじいさんが吉川旅館という旅館を，この平和記念公園の中で経営されていました。一応こんな感じで。

以上で，私の広島市の人の被爆体験伝承講話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

・文中の「★★」は，聞き取り不明箇所。

資料６

長崎市「交流証言者」講話　田平由布子氏（2019.7.25）文字起こし（33分８秒，6,819文字）

〇自己紹介（２分36秒，609文字）

〇田平　私は長崎から来ました田平由布子と言います。私は今，長崎原爆の被爆者の体験をご本人から受け継いで話す活動をしています。これまで兵庫，岡山，大阪，岐阜，千葉，鹿児島など全国各地の学校や，長崎原爆資料館で被爆体験を話してきました。

私は長崎で生まれ育ち，学校で平和教育を受けてきましたが，原爆や戦争のことにあまり関心を持つことはありませんでした。しかし，大学の授業で初めて核問題を学び，なぜ核兵器は悪なのかを問われ，核保有国の存在を学びました。それは平和教育では学ばなかったことなのでとても新鮮でした。自分も核兵器廃絶の活動をしたいと思い，今から５年前，ちょうど大学４年生，皆さんと同じ年ぐらいにナガサキ・ユース代表団の一員となりました。これは長崎に住む若者で構成され，核兵器廃絶の分野で自ら行動する人材になるための団体です。私はこのユース代表団の一員としてニューヨーク国連本部に行ってNPT再検討会議の傍聴や，政府関係者，NGOとの意見交換などを経験しました。

大学卒業後も何か活動したいなと思っていたときに，この被爆体験の継承事業を見つけました。実は今までは，被爆していない人が語っても説得力がないと無関心でした。でも私が尊敬する大学の先生が，被爆していないからといって体験の継承を放棄するのは違うと思う，とおっしゃっていたのを聞きました。そこで気持ちが変わった私は，早速この事業に応募し，被爆体験を受け継ぐこととなりました。

１．あなたにとって平和とは？（３分17秒，845文字）

さて，これから被爆者の話に入っていきますが，その前に皆さんに質問があります。あなたにとって平和とは何ですか。さあ，あなたにとっての平和をこれから２，３人ほどに聞かせてほしいんですけど，我こそはっていう方，手をあげてください。でね，こういうときに手があがらないんですよ。ですから，私がこれがちょっと当てていきたいと思います。じゃあ，いいですか。

〇男　はい。

〇田平　あなたの思う平和を教えてください。

〇男　私が思う平和とは，血が流れない，事故じゃなくて殺人とかそういうのがない世の中だと思います。

〇田平　ありがとうございました。血が流れない，殺人などがないというような，これすごく平和のために大事なことだと思います。ありがとうございます。もう１人いいですか。

あなたの思う平和★★。

〇女　私が思う平和，っていうのは自分の国ばっかりじゃなくて，他の国の人同士が，仲良く，っていうわけじゃないけど，お互いに受け入れ合うことができることが平和だと思います。

〇田平　ありがとうございます。本当にすごくいい答えを言ってくれました。自分の国だけじゃなくていろんな国の人がお互い仲良くということを言ってくれました。今も戦争がある中でそういうことはすごく大事だと思います。あ

Akita University

りがとうございます。そうしたら，もう１人向こうにいきます。じゃあ，いいですか。

○男　平和とか平和じゃないとか考えないで済むような，平和じゃなかったらもっと平和になればいいなと思うところですけれど，平和のときって何も考え，あまり関心がないところで，そういう考えない状態になってることが平和だと思います。

○田平　これものすごく深い意見ですよね。何か，今私たちが住むこの国は平和だな，って思うことがあるかと思います。私もそうだなと思います。でも，平和だとか平和じゃないとか考えている，っていうことがなくなることが本当の平和かもしれない。ありがとうございました。で，今発表していただいた以外の方も，これが平和というものを頭の中に思い描いてくださっていると思います。

２．被爆者である吉田勲さんの紹介（1 分 36 秒，575 文字）

それでは，もし今あなたの考えた平和が原子爆弾で奪われたとしたら。74 年前の 1945 年８月９日。このファットマンという１発の原子爆弾が長崎に落とされました。多くの方が犠牲になり，長崎の町は焼け野原になりました。生き残った方も心と体に深い傷を負いました。私たちと同じように生きていたごく普通の方々が，原子爆弾によって人生が大きく変わってしまいました。

私が②年前に出会い，お話を聞いた被爆者，吉田勲さんも原爆の被害を受けたことによってつらい思いや苦しい思いをしてきました。ですが，あることがきっかけとなり，これまでの苦悩を使命に変えました。私が勲さんのお姿に見いだしたのは，平和とは自らが作るものという信念でした。今日はこの場をお借りして，吉田勲さんの被爆体験と平和への思いをお話しさせていただきます。それでは聞いてください。

勲さんは今から 79 年前の 1940 年８月 24 日に生まれました。お父さんはお店を営み，お母さん，おばあちゃん，２歳年上のお兄さんがいました。しかし勲さんが生まれた４カ月後お父さんが 32 歳の若さで働き過ぎて体を壊し亡くなりました。その２年後，今度はお兄さんが病気で亡くなり，年末にはお母さんが再婚して家を出て行きました。そして，繁盛していたお店を手放し，おばあちゃんと２人だけの寂しい生活が始まりました。勲さんが被爆するのはその３年後，５歳になる直前です。

３．長崎市への原爆投下と被爆の実相（3 分 31 秒，633 文字）

その前に長崎に原爆が投下されたときの話をします。８月９日，日本時間午前２時 49 分，アメリカ軍の爆撃機Ｂ29 ボックスカー号は南太平洋にあるテニアン基地から日本に向かいます。

まず投下の第１目標である福岡県小倉市，現在の北九州市小倉北区に向かいました。しかし，前日の空襲による煙と曇り空のため，投下目標地点が見えず断念しました。そこで，第２目標の長崎に行きました。投下目標である市の中心部辺りに行くと，ここも雲がかかっていました。しばらく辺りを飛んでいるとたまたま雲が切れて長崎の町が見えました。

そこは長崎市の中心部から北に３キロほど離れた，松山町というところでした。当時，1,860 人余りの方が住んでいて，およそ 300 軒の民家があり，近くには学校もありました。しかし。

長崎の街は見渡す限りの焼け野原になりました。

原爆が爆発すると大きな火の玉ができて，ものすごい熱線と放射線が出されます。熱で暖められた空気は勢いよく膨らみ，激しい爆風が起こります。

爆風は家や学校など多くの建物を倒しました。ガラス瓶を溶かしてしまうほどの熱線は人の体にひどいやけどを負わせ，放射線を全身に浴びた人の多くは亡くなりました。また，放射線は血液を作る骨髄に影響を与えます。爆心地から 500 メートルにいた被爆者の写真を見ると，血液の細胞がほとんど作られていません。

当時，長崎市に住んでいたおよそ 21 万名のうち 1945 年末までに 73,884 名が亡くなり，74,909 名が重軽傷を負いました。死者重軽傷者の数は市内人口の 70 パーセントにものぼりました。

４．吉田勲さんの被爆体験（3 分 29 秒，969 文字）

それでは，勲さんの話に戻ります。原爆が落ちる直前，外で洗濯しているおばあちゃんを見たり，その周りをウロウロしたりしていました。そのとき，Ｂ 29 を見つけたおばあちゃんが勲さんに，敵機の飛びよるけん，家ん中入らん

Akita University

ね，と言いました。驚いた勲さんは慌てて家に入り，おばあちゃんも洗濯物を持って家に入ったそのとき，原爆がさく裂し，外がオレンジ色に明るくなりました。爆風で障子はガタガタ音を立て，畳が浮き上がり，窓ガラスは粉々に割れました。勲さんは恐る恐る２階にあるおもちゃや机の様子を見に行くと，窓ガラスの破片が部屋中に散らばり，タンスや本棚が倒れ，煙が舞っていました。

とにかく防空壕に行こう，おばあちゃんがぼうぜんとしている勲さんに言いました。２人で坂の上にある防空壕に向かいます。原子雲で薄暗い中を進んでいると，勲さんはなぜだかとても喉が渇きました。おばあちゃん，水ばくれんね。すると，おばあちゃんがたまたま通りかかった兵隊さんにお願いして水を飲ませてくれました。再び歩みを進めると，今度は爆風で飛ばされた屋根が落ちてきて，運悪く勲さんの口元を切りました。血がだらだらと流れたので傷口を手ぬぐいで押さえ，痛いよう，痛いよう，と言いながら防空壕を目指しました。

これがそのときの傷です。２センチくらいの大きさでずっと消えることはありませんでした。

さて，坂の上にある防空壕の中は蒸し暑く，泣いている子や叫んでいる子もいました。しばらくすると，上半身に大やけどを負った人が担架に乗せられて運ばれてきました。体にはやけどの手当としてキュウリの輪切りが貼られていました。

夕方，防空壕の外へ出て長崎の町を見ると，真っ赤に燃えていました。原爆による熱線や爆風と合わさって発生した火事により，長崎駅のほうまで焼けました。その明るさはまるで夕焼けのようでした。勲さんとおばあちゃんは防空壕で一夜を過ごし翌日自宅に戻りました。

それからおよそ２週間後，勲さんは５歳になります。その頃，体に切り傷やできものができたらうみができた後，かさぶたになる症状が出始めました。原因は放射線による白血球減少だと思われます。その間には小学校に入学する時期が来ます。学校ではかさぶた野郎とあだ名をつけられ，あっちへ行けうつると言われ，いじめられました。かさぶたの症状は２年ほど続きました。

５．戦後の吉田勲氏の暮らしと核廃絶活動（7分59秒，1,625文字）

しかしそんな中,家庭の事情で愛知県にいる親戚の元で暮らすことになりました。長崎とは全く違う環境で過ごす中，次第に被爆したことを思い出さなくなっていきました。また原爆が落ちた日のあまりにも悲惨で怖かった記憶を無意識に封印し，無関心を装うようになりました。

およそ７年を一緒に過ごした親戚は生活が苦しくなり，勲さんの面倒を見ることが難しくなったので勲さんは長崎に戻りました。中学卒業を控えた冬，おばあちゃんが亡くなりました。原爆が落ちる直前，家ん中入らんねと言って自分を守ってくれたおばあちゃん。何とも言えない悲しみを抱えながらしっかりしろと自分にいい聞かせました。卒業後はパン屋さんや喫茶店などで仕事をし，23歳で独立しました。

結婚し２年後に長男を授かるも，子供に被爆の影響が出たらどうしようと不安で眠れませんでした。生まれた子は健康でほっとしましたが，いざという時のために，被爆者であることを証明する被爆者健康手帳を取得しました。勲さんは４人の子供に恵まれ幸せでしたが，被爆したことは家族にも黙っていました。

そんな勲さんの人生に転機が訪れたのは今から25年前の1994年２月，53歳になったときでした。きっかけは原水爆禁止宣言という声明文との出会いでした。そこにはこのような一文があります。われわれ世界の民衆は生存の権利を持っております。権利を脅かすものは魔物であり怪物であります。この思想を全世界に広めることこそ，全日本青年男女の使命であると信じるものであります。勲さんは原子爆弾と水素爆弾すなわち，核兵器を絶対悪と訴えたこの宣言にくぎ付けになり，無我夢中で手帳に全文を書き写しました。そして青年男女の部分を被爆者に置き換えました。すると，被爆したことをいつまでも知らんぷりしていていいのだろうか，自分も何かしなければいけないという強い思いが湧いてきました。そこで早速，被爆者の団体に入りました。

ところで，勲さんの別名は行動派のおじいちゃん。私の名前は勲，動く四つ足と書く，行動派のおじいちゃんだからと語ってくれました。その名のとおり核兵器廃絶の活動は国内外にわたりました。

アメリカやロシアなどが核実験を行うと雨や雪の日でも抗議の座り込みをして，原爆の日に行われる式典では飲み水を求めながら亡くなった方々を思い，被爆者の代表として水を捧げました。

それから修学旅行生へ被爆遺構を案内しました。時には雨が降って案内ができなかったこともありましたが，そんなときには生徒の宿泊先で被爆体験講和をしました。案内した生徒は310校，5,600人にものぼりました。

勲さんは自らも被爆者でありながら，他の被爆者にも手を差し伸べていました。彼らが被爆者健康手帳や原爆症の認定を得るため被爆者を守る法律を勉強し，2001年に被爆者相談員になりました。勲さんの支援は手帳の取得が８名，

Akita University

原爆症の認定が４名という実を結びました。

今から20年前にはニューヨークの国連本部を訪れ，核兵器廃絶を求める６万6,000人分の署名を手渡しました。国連に勤めているダナパラ氏からはその行動を高く評価されました。

その後もニューヨークの高校で被爆体験を語り，11年前には100日間にわたる世界一周の船旅を通して被爆体験を20カ国に発信しました。

その途中で足を運んだ国連本部では核兵器廃絶に全力で取り組んでほしいと意見を述べました。

さて，勲さんは原水爆禁止宣言と出会い，被爆体験の語り部や核兵器廃絶の活動を23年続けました。これほどの活動をするようになるまで被爆者だと誰にも明かさず生きてきました。その長さは48年間，半世紀にもなります。その間どれだけ苦しい思いをしてきたでしょう。

そんな勲さんのお姿を一番近くで見ていたのはご家族でした。幼くしてお父さんとお兄ちゃん，おばあちゃんを亡くし，お母さんとも別れた勲さんですが，結婚して子供４人，孫８人の大家族になりました。だからこそ核兵器のない世界を作るために活動しているんだよと教えてくださいました。

６．吉田勲氏の動画（２分34秒，392文字）

そして２年前の８月に被爆者としての思いをこのように語ってくださいました。

○吉田　まず１点目は核兵器です。原子爆弾が一日も早く世界からなくなってほしい。そういう点で言えば，長崎を最後の被爆地にしよう，いうことも訴え続けたい。そういうふうにして核兵器をなくす，原子爆弾も水素爆弾も含めて一切をなくしていく。このことがやっぱり一番大事なことではないかな。もう一つは，それぞれの人がやっぱり自分たちと同じような思いをしてほしくないということが二つ目に訴えることじゃないかなと。ちなみに，長崎市内の被爆者は30,813人。だから10月，11月頃になると，おそらくもう３万を切ります。このことは新聞でも大きく発表になると思う。３万人を切ったという。だから，もう一度戻ると核兵器をなくすというものが第一であり，それから自分たちと同じような辛い思い，悲しい思い，痛い思いをさせないためにも，っていうことが大事かなと。

７．現在の核兵器（３分38秒，783文字）

○田平　さて，今まで勲さんの人生や戦争という過去を見てきましたが，ここからは現在に焦点を当てて，核兵器のことをお話していきたいと思います。

世界には今も核兵器があります。核兵器を持っている国は９カ国あります。アメリカ，イギリス，フランス，ロシア，中国，インド，イスラエル，パキスタン，そして北朝鮮。この９カ国が核兵器を持っています。

まず，はじめに核兵器を持ったのはアメリカ。広島，長崎に原爆を落とした1945年のことです。ロシアはアメリカに対抗するため，４年後に核兵器を持ちました。その後，イギリス，フランス，中国などが続き，現在では９カ国になりました。

それでは今，核兵器が使われたらどうなるでしょうか。長崎にもたらされた被害，そして犠牲者やけが人の数をもう一度思い出してみてください。

核兵器は１発だけで街全体にとてつもない被害を与え，たくさんの命を奪います。生き残った方の中には，爆風で吹き飛んだガラスの破片が刺さり，今も体の中に残って痛みに苦しんでいる方がいます。病気になったら放射線を浴びたからではないかと不安が消えません。勲さんのように子供や孫に影響しないか悩むこともあります。被爆者の方々は，自分たちと同じような思いを誰にもしてほしくないと，核兵器の廃絶を訴え続けていますが，今も世界に核兵器は，13,880発もあります。これが地球上の全ての生き物を何度も何度も殺してしまえるだけの数です。それだけではありません。これらの国は，核兵器を新しく性能が高いものに作り変える計画を進めていて，そのために，たくさんのお金を使っています。これがとても悲しく，残念なことです。

核兵器が使われたらどうなるのか。身を持って語ってくださる被爆者は，今では３万人を切り，平均年齢は82歳になりました。核兵器のない世界を作るために，そして二度と核兵器が使われないために，私たちは何ができるのでしょうか。

８．私にとって平和とは？（２分３秒，388文字）

話の冒頭で皆さんに質問をしました。あなたにとって平和とは何ですか。その答えが，平和な世界を作り，ひいて

Akita University

は核兵器や戦争をなくすことにつながると思います。ちなみに私にとっての平和は，自分も，そして周りの人も幸せであることです。目の前の１人を徹して大切にしていき，被爆地長崎から平和の種をまいていきたいと思います。

核兵器廃絶と世界平和を願って尽力なされた勲さんは，２年前の10月，77歳でお亡くなりになりました。お亡くなりになったその日にも，中学生に講話をする予定だったと言います。私が初めてお会いしてから２カ月半後。３回目の顔合わせを心待ちにしていたときの突然訪れたお別れでした。最後に，勲さんが残してくださった言葉で話を結びます。戦争ほど残酷なものはない。戦争ほど悲惨なものはない。平和ほど尊いものはない。以上で勲さんの被爆体験を終わります。聞いてくださってありがとうございました。

〇質疑応答（26分50秒，8,526文字）

〇男　ありがとうございました。せっかくの機会なので，何でも質疑応答ある人は自由に質問してもらいたいなと思いますけど。なかなか質問は★★いつも受け付けないので。せっかくの貴重な機会ですから。じゃあ森井君。

〇男　いいですか。このまま。

〇男　★★マイクを渡したいので。録音の関係で。

〇男　すいません。ありがとうございます。教育文化学部地域文化科３年森井というものです。今回は，お二人の話を聞いていて，本当に心が揺さぶられたというのが正直な気持ちです。

〇男　★★，大丈夫ですか。

〇男　２人まとめてでの感想で大丈夫ですか。まず，じゃあ特にまとまってないんですけど。石綿さんのほうから少し話，感想を聞きたいと思うんですけど。やっぱり細川さんの被爆体験をお話ししていただけたんですけど。そこで，やはり広島ということで，広島の平和祈念館のほうにも寄贈していただけるその，ただ，平和活動に積極的な人だったな，っていう印象を持ったのが一番の印象です。その中で，これは，石綿さん自身がコメントしていたことなんですけど，息子や娘には自身の被爆体験を話さないんですが，孫娘には自身の被爆体験を話していました，って言うふうにおっしゃっていました。このことは，ちょっと僕自身としては，戦争やもしくは被爆して得た心の傷，っていうのは半世紀，四半世紀以上年月が経ないと癒えるというか，話せるまでに治らないというか，もしくは自分が亡くなられる直前という言い方がいいのか分かりませんが，それだけは話さなければいけないという使命感があるのかな，ということを考えながら聞いていました。じゃあちょっと石綿さんに関しては★★。田平さんに対しては感想というか，あれなんですけど，まず単純に思ったのは★★24歳でしたっけ。

〇田平　私，26です。

〇男　６ですか。僕も22なんで，だいぶ年齢が近くて何かすごい，僕らの近い年でここまで頑張っているのがすごいなという印象です。尊敬します。吉田さんの被爆のお話を聞いたんですけど，そのときにやっぱり冒頭で，これまでの被爆の苦悩を使命感に変えた，っておっしゃってたんですよね。やはり吉田さんも原水爆禁止宣言という言葉の宣言が出てから，48年間の苦悩が積極的な平和活動に変わっていったんだなということ。やはり何か伝えたい思いが，それまでたまっていたものが，何かあったんでしょうが，そうやってやはり後世に伝えなければいけない，っていうのが田平さんににかかわらず，★★に通じるものがありました。一応，感想こんな感じです。質問をそれぞれ一人ずつに聞きたいんですけど，石綿さんに関しては横浜市にお住まいになっていることなんですけど，実は僕も横浜市から来た★★。ちょっと聞きたいんですけど，なぜ横浜の出身でありながら，なぜこういう活動をしているのか。というのは僕も横浜にいたときは保土ヶ谷にある★★というところで平和活動に参加してたりしてたんです。そんな中で，僕は自分の生まれだから，っていう理由があって平和活動をちょっと参加したんですけど，石綿さんはなんで広島なのかな，っていうことをお聞きしたかった。田平さんのほうには，吉田さんとお話をしていてなんで吉田さんがここまで原水爆禁止宣言の★★言葉を受けて変わったのかな，っていうことを当時聞いた吉田さんのふるまいというか，

Akita University

言葉には残ってないものから，何か聞ければなと思いました。ちょっと長くなりましたが以上です。

○男　じゃあ順番に石綿さんと田平さん，どうぞ。

○石綿　保土ヶ谷ですか。

○男　港南区です。

○石綿　港南区。私は旭区です。★★。変に思いますか。よくやったと思いますか。どう思いました。

○男　離れてるので，★★，なんでかなと。

○石綿　物好きなんですね。というのは，ことの始まりは小学校のときなんですけど，社会科の教科書を後ろめくってきますと，きのこ雲の写真が★★載ってるんですよね。それを見たときに，すごいな，ってのがまず第一印象。教科書の★★，読んでみますと８月６日に広島，９日に長崎，これしか書いてありません。で，担任に聞いてみましたら担任も戦後だから，何も分かりません。ただ，こういう爆弾★★，それで終わりでした。で，そのとき，あ，そうなんだってことで，そのときもう家に帰ったんですけども，それずっと心の中に残ってまして。で，毎年８月になりますと各メディアは戦争の特集やりますね，新聞でもテレビでも。その中で神奈川県に地元の新聞社で神奈川新聞社，ってあるんです。そちらの記事を目にしまして，ちょっと持ってきてますけども。こちらの写真，これは新聞なんですけど，コピーしたやつ。この新聞は1991年，平成３年の新聞です。今から28年前の写真になります。この写真を目にしました。これは，みなとみらい地区って行かれたことありますか，横浜の。今でこそ結構遊ぶとこいっぱいありまして，賑やかな場所なんですけれども，昔はここに，今のJR，っていう旧国鉄の機関庫の跡がありました。あと三菱重工のドック，って船を造る工場がたくさんありました。で，今ちょっと見えないと思うんですけど，今でも横浜そごうってデパートありますけど，ここにちょっと写ってます。ここは機関庫の跡だったんですけども，ここにこの今，写真が写ってます，木製の電信柱が１本立ってました。この記事を目にしまして，近かったもので私も見にいったんですね，今でこそ写真みるときれいになってますけど行ったときは夏のさなかで，私の上背よりさらに高い草がボーボー生えてまして，この１本の電柱探すのにすごい時間かかったんです。やっとこかきわけて入って見つけましたら，本当にこのぐらいの直径ですかね，細い電信柱です。国鉄の通信用の電信柱だったんです。この方はコナガヤさんって言いまして小田原に住んでました。で，この電信柱を一周しましたら，裏側に雨が降っても字がにじまないようにビニールで覆いかぶさって，この電信柱を撤去するときには連絡をほしい，っていうことを書いてありました。その文字を見たときにさらに興味がつのりまして，早速その神奈川新聞社に電話しました。今ですと個人情報云々で教えてくれませんですけど，当時は何でもかんでも教えてくれます。すぐにいってコンタクト取りまして小田原の方に3，4回足を運びまして，この電柱のいきさつ，そして当時の横浜大空襲のお話を聞かせていただきました。あと必要な資料も見せていただきました。そのことを聞きながら，やはり戦争は本当にやっちゃいけない，怖いんだということを改めて認識したときでもあったんですけれども，そうした中で，ずっとその学生終わって成人になって社会人のときにたまたまNHKニュースで，夕方だったと思うんですけど，広島市の広島市伝承の養成講座のニュースやってました。それを見て，こういうのやってみたいなと思ったんですね。それで今１期生だから２期生３期生続くんだろうと思って毎日毎日，広島市のホームページを追っかけてまして，ようやく２期生の募集が来ました。それ内容見てみますと，３年間の時間を要すると。しかも場所は広島だと，ああ広島かと思いまして，横浜と広島じゃすごい距離，東京★★終わったらぱっと行ってぱっと帰れますけど，広島じゃ日帰りも無理だしなと思いながら，あと仕事もしてますし，家庭があります。どうしようかなと思って取りあえず広島市の方に電話してみました。そしたらこういう答えが返ってきました。そのお気持ちだけでも十分だと，毎回来られなくても資料の方は★★，私の方から差し上げますから，もしこれるだけでもいい，構いませんからやってみたらどうですかって，そういう言葉で背中を押されまして，よし，やってみようと決心してやった次第です。それで２期生に応募しました。ただ，あとは問題は家庭です。妻になんというかと★★。今お話にありましたように私，横浜市の生まれ，横浜市の在住ですけども，親戚に被爆者は何もいません。妻に言いましたら，この話をしましたら，なんであなたがやるの，って言われました。まさにそれはあると思います。だけども先ほどお話ししました小学校のときのあの思い，あれから始まりましていろいろ話しました。

Akita University

だけど，彼女にはそれを伝わりません，気持ちが。★★諦めて，取りあえず，じゃ行ってくれば，ってことで行かしてもらいました。そんときは★★でした。３回で終わると思ってました。３年行ったから３回，で，１回目行って帰ってきて，あと２回だから終わりだというふうに妻は思ったんですけど，でも３回★★帰ってきました。さあ，３回を終わった。どうしよう，あと２年もあるんだよなと思いながら，どういうふうに★★口実にしたらいいかなと思っているんですけど。そっからがここは私言わなくていいんですけど，あえて言っちゃいますけどね，全部。いろんな★★があったんですね。なぜ，あんなことやるんだって。なぜ行くんだと。★★旅費だって広島市が出してくれるわけじゃないんです，毎回毎回，自分で実費で行くんです。毎回毎回どのツアーが安いか，ってネットを検索して，旅行会社行って，その中から安いツアーを見つけて。ホテルはどこでもいいんです。寝るだけですから。ようは昼間だけの仕事ですから。それで安いツアー見つけて毎回毎回行って。新幹線より飛行機のほうが安かったら飛行機で大体行くんです。おかけでマイルもたまりました。★★。ただ段々と広島，本当にゆかりの地でも何でもないんですけども，行くことによって広島にいる同士，仲間たちが快く受け入れてくれたと。そうしたことで，行きやすくなったことも事実です。そうした中で，被爆者の方といろいろお話を聞きながら，本当に先ほどお話したように，テレビ，新聞には出ない真実，それが本当にいっぱいあるんです。ですから，皆さん，もういろいろ今，興味あることたくさんあるんです。自分の足で現地に行って，必ず何かあるはずです。そこから新たな発見して，また新たにそこから自分で独学で勉強して，さらに知識を学び取ってもらいたいと思います。これが本当の，自分らしい自分の知識を蓄える。ですから今回，先ほども言いましたように，夏休み何も予定はないようでしたら，ぜひ，長崎の方もいるでしょうが長崎にも行ったり，広島に行ったり，この資料館に，ぜひ★★オープンした★★，遺品，何かしら感じることがありますんで，もし皆さんも★★教職になったときの，このときの平和についての思いを生徒さんたちに語ってもらいたいなと思っています。そうした中で，３年間研修終わって，無事，こういった資格で，こういった場でお話をしたいと思います。今日もあのとき，いろいろけんかしたというか，反対した妻は快く送り出してくれました。★★今日は気持ちよく送り出してくれました。

○田平　はい。ご質問ありがとうございます。勲さんが原子爆禁止宣言に出会って変わった，そのときの心境，そして，言葉にならなかった思いということですよね。勲さんが語っていた中で，それから，勲さんのことは新聞記事とか被爆体験の手記にも載っていたんですけど。勲さんがそのとき思ったのは，48年間の空白がある，っていうことだったんです。勲さん５歳で被爆して，学校でいじめられて，その途中で長崎を離れていた，っていうこともあったんですけど。その分，被爆の記憶を薄めたい，見て見ぬふりをしたい，っていうことで，ずっと生きてきましたと。それで53歳になりました。そのときに原水爆禁止宣言を見て，自分は48年間何をしてたんだと思ったみたいなんです。そこから，その宣言を見た翌日，長崎市役所に電話をかけて，長崎に被爆者団体はいくつありますか，って問い合わせて。その中の一つの団体に入り。それから国内外で活動をするようになりました。勲さん，本当にたくさんの活動をした，っていうことは伝わっていますよね，国内外で。国連にも行き，って。そういうふうに，もうとにかく空白の48年間を埋めたい，そのためなら何でもしようという思いで，貪欲に取り組んだんだよ，っていうことは教えてもらいました。例えば，例えとして，私たちがジャンプしようとしたら，ここに立ったままジャンプしようとしたときも１メートルぐらいしか飛べないわけです。でも，ものすごく助走をつけてジャンプしたら何メートルも飛べるはずです。勲さんも，それと同じような感じじゃなかったのかなと思います。48年間ためにためてた思い，これを原水爆禁止宣言というきっかけでドカンとあふれ出した。そこからいろんな活動をやってきたという思いで，いろんな活動をしてきたんじゃないかなと思われます。これで質問の答えになってますか。ありがとうございます。

○男　じゃあ，その他どうですか，★★。誰かいませんか。じゃあ，はい。

○女３　すいません，ありがとうございます。とても貴重な話，★★ありがとうございましたという気持ちでいっぱいです。私の興味あるものは，文化財とか，これから残りいくものたちなんですけれども。そういったものが残る，っていうのは，やっぱり人が語り継いでいくからこそ残るのかなと思って，とてもお二人の活動は，すばらしいものだなと改めて感じました。石綿さんのほうに質問なんですけれども，私は数年前に，片渕須直監督がこうの史代さん原作で，この世界の片隅にという映画を作ったということで，その映画を見ました。原作者のこうの史代さん自身も広島の出身ということもあって，この世界の片隅にという映画はとても現実的ですごく勉強になった作品でした。その中で，主人公か一番最後の辺りに，こんなに苦しんだのに敗戦したのは信じられないと，最後の一人になるまで戦う，っ

Akita University

ていうせりふを言ったのが印象的でした。今まで聞いた中では，原爆，っていうものが駄目なもの，戦争が駄目なものというイメージだったんですけれども，被爆者の中には，そういう考えを持った方もいるのではないかと思ったんです。だから実際のところどうなのかな，っていうのがとても気になっています。

○石綿　もう１回，ちょっといいですか。★★最後の，終わりのところでいいですよ。

○女　聞きたいところは，主人公が最後のほうで発したせりふなんですけれども，こんなに苦しんだのに，敗戦は信じられない。当然最後の一人になるまで戦うと言っていて，そのせりふがあったから，戦争とか原爆，っていうものは，本当に駄目なもの，って思っていたんですけれども，そういう苦しんだのにも負けてしまった悔しさって，戦いたい，っていう思い，平和だけじゃない思い，っていうのもあるのかなと，疑問に思いました。

○石綿　すいません。私もその映画は見てないんですよ。すぐ見ますんで，すいません。今のこの質問のことなんですけど，問いかけに関しまして，お答えするとだと，私個人の意見としてお話しさせてもらうと，やはり家族とか知り合いとか身内を亡くなられたと仮定してお話ししますけれど。それでいろんな生活★★私，★★とかいろんな★★ありましたよね，生活の犠牲になって，いろんな苦しい思いをしたと。最後の一人になっても戦ってやる，っていう話ですね。それはやっぱり，いろんな経験してないことを長年にわたって経験された，っていう先人の方々の思いというか，私も戦後生まれで，よく，うまく表現できませんけれども。やはり犠牲者のことを思うと，悔しさ，無念さ，その二言になんか，思いがつのるのかなという，というものは，私は思うんですけど，どうなのかな。★★。いやいや，★★。一人で戦う，っていうことは，やはりよほどの決心というか，思いだからこそ発する言葉だと思うんです。当時のあの終戦間際の日本の軍人のこと考えれば，もう最後は特攻隊と言って自ら飛行機に乗って，命★★いくわけですからね，もう本当にもう，勝利は，負けるというのは分かっていたわけですよね。それをだけど，当時の日本はうそをついて，放送でことごとく偽りの放送をして，日本優勢とか，っていう報道をしてたんですよ。日本人は，日本国民は，日本のテレビ局，メディアにだまされてて生活をしたということなんです，言ってみれば，★★繰り返してみれば。そうすると，なぜ負けたというと，あんな放送をして何で負けるんだという，そういう思いはまず当然あったと思うし，何でこんなことになるんだ。まして沖縄戦となると，沖縄の人々は日本軍は敵だと言いますからね。日本本土での日本軍は友軍だけども，沖縄県民の日本軍は，敵だと言いました。なぜかというと，ガマ，洞穴にみんな逃げ込んだ後，兵隊も逃げ込んで来るんですけど，赤ちゃんが泣きだすと，首を，押さえて殺せという，とても同じ日本人同士では考えらない言葉を兵士は言ったわけなんです。だから沖縄国民は，日本が敵だと言ったんです。いろんなそのことを総括して，私もぱっと★★うまく答えられなくて大変申しわけないんですけれども，考えるとやはり無念さ，苦しさ，いろんな思いが入りまじって，敗戦というのは信じがたい，信じられないというか，それがあってのその戦い抜くという思いも★★変わってくるんじゃないか，っていう。あと当時の教育ですよね。当時の教育が間違ってるから，ああいう特攻隊というのを考えるわけです。だから皆さんにお願いしたいことは，皆さん選挙権お持ちですよね。今回選挙，行かれました。行った方どのぐらいいます。ぜひ，私たちは関係ないと思うんじゃなくて，時の政権を握っている，総理大臣ですか，そういう人たちが，決定権というかそういうのを判断するわけですから，ぜひ皆さん，俺には関係ないと思うのではなくて，政治に直視してくれということです。政治に関心を持ってくれということです。変な話，皆さんまだこれからの方々ですから，もし戦争が起こったら，皆さんも多分戦争に行く方です，兵隊として。そんなことはやっぱり起こってほしくないと私も思うし，皆さん，戦争に行きたいと思いますか，思わないですよね。だから，当時の教育★★，間違っているんですよ。だからそのためにも皆さんは，しっかりと★★これを勉強をされて，立派な教育者として，さらに後進の指導を学校でやってほしいなと思って，今日，今思っております。ちょっと変な答えで，申しわけないですね。本当にね。

○女　ありがとうございます。

○男１　最後に田平さんどうですか。同じ質問ですけど，最後にしめる言葉。

○田平　しめる。

Akita University

○男　映画は見ました。

○田平　映画，私も拝見していないですけど。どういう感想を述べたらいいですかね。

○男　何でも自由に。

○田平　何でも自由。

○男　感想でも結構です。今のやりとりを聞いて。

○田平　そうですね，今のご質問，石綿さんに対するご質問なんですけど，私個人の意見としては，やっぱり戦争を経験した人，って一口に言っても，本当にいろんな人がいる中で，その中で自分はこう思う，だけど俺はこう思うとか，一人一人違いがあってしかるべきだなと思います。ちょっと話はそれるんですけど，被爆者の方はみんな，自分と同じような思いをしてほしくない，っていうふうに，私，講和で言いました。それは勲さんの思いとしてもそうだし，被爆者みんなの思いと一緒だというふうに私は聞きました。これが，もし自分だったら絶対そんなことを思えないなと思いながら勲さんの話を聞いて，また，被爆体験を実は伝承している自分がいますと。戦争が起こったら本当にどうなるか分からない。もしかしたら，自分は最後の一人になっていても戦うかもしれない。もし自分が戦争を体験しているのであれば，自分は最後の一人になっても戦うかもしれないと思うかもしれないし，われ先に逃げるかもしれない。そして，被爆者の方の中にも，もう誰にもこの思いをさせたくないと思っていらっしゃる方がもうほとんどだと思うんですけど，もしそれが私だったら，みんなも同じ苦しみを味わえと思うかもしれないと。今の質問を聞いて，そして自分が継承する中で，人間の気持ちというのは本当に難しいし，相反する部分もたくさんあるなと思いました。だからこそ，人間を狂わせてしまう，人を殺してしまう，そして未来を，将来を奪ってしまう戦争というのは，絶対あってはならないなと，私はこの伝承の活動をしながら思うことです。

　そして最後に私から一言だけ言うと，私のことは忘れてもらって構わないです。だけど，吉田勲さんのこと，そして最後に出た，戦争ほど残酷なものはない，戦争ほど悲惨なものはない，平和ほど尊いものはない。この三つの言葉だけは，皆さん絶対に忘れないでほしいなと思います。それが私と，そして今，天国にいらっしゃる勲さんの願いです。これでよろしいでしょうか。

○男　はい，ありがとうございます。

○田平　ありがとうございます。

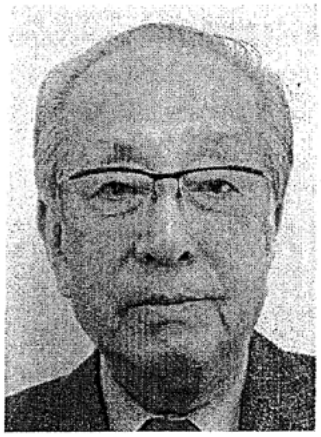
○男　じゃあ最後にお礼の意味も含めて，お二人に拍手★★。どうもありがとうございました。皆さんどうもご苦労さまでした。最後にアンケートだけ書いてもらってそれだけ忘れずに提出して解散してください。

・文中の「★★」は，聞き取り不明箇所。

Akita University

資料７

細川（ほそかわ）　浩史（こうじ）さんの被爆体験



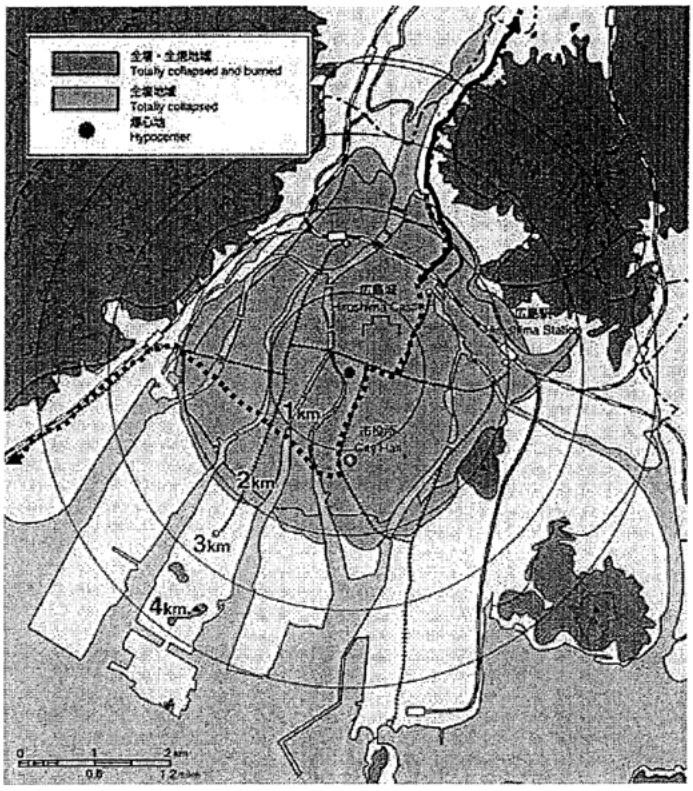
プロフィール

1928年（昭和３年）１月生まれ。
17歳のとき、基町（現在の東白島町）にあった広島逓信局（爆心地から 1.3km）の４階で勤務中に被爆。
ピース・ボランティアの一員

被爆の状況

自席にいたとき、突然、強烈な閃光と爆風によって吹き飛ばされ、たたきつけられた。聴覚が一時的に失われ、炸裂の「ドーン」という音は聞こえなかった。やけどは免れたが、窓ガラスが粉々に砕けて突き刺さった。隣の逓信病院には負傷者が押し掛けていたが、病院の機能はなかった。同僚と京橋川の河原に逃げる途中、つぶれた家の下から助けを求める声が聞こえたが、救出する力はなかった。河原は大やけどを負ったひん死の人々で一杯だった。水を求められたが、やけどの重症者に水を飲ますと死ぬと教えられていたので与えなかった。目の前で次々に死んでいった。飲ませてあげればよかったと今も悔やんでいる。夜、牛田の不動院そばの同僚宅に泊まり、翌日、宮島の自宅に帰宅後、妹の死を知った。妹は、県立広島第一高等女学校１年生で、土橋付近（爆心地から800m）で動員学徒として建物疎開作業中に被爆した。救援トラックで臨時救護所となった観音村（現在の広島市佐伯区）の国民学校に運ばれたがその夜死亡した。妹は入学した４月６日から８月５日までの日記を残しており、後年、それを基にNHKが特集「夏服の少女たち」を制作した。平成８年には日記を出版し、教科書などに取り上げられ、現在も使われている。

被爆後の経路



【８月６日】→
基町
↓
白島九軒町（京橋川の河原）
↓
神田橋
↓
牛田町

【８月７日】⇢
牛田町
↓
基町
↓
鷹野橋
↓
宮島線草津駅～宮島口
（臨時電車）
↓
宮島（連絡船）

Akita University

資料９　広島市「被爆体験伝承者」・長崎市「交流証言者」講話アンケート結果

	1　広島市被爆体験伝承者講話	2　長崎市交流証言者講話
1	*原子爆弾のおそろしさを改めて感じた。語りの中で，助けを求めている人々に謝りながら逃げていくという話がとても印象的であった。*助けなければならない，でも自分の事で精一杯。様々な葛藤があったと思い，当時の状況がいかに悲惨で，非常なものであったかを思い知らされた。 原子爆弾が多くの人々の命を奪ったこと，残された人々も，差別や後悔の念に苦しんで入るということに目を背けずに，この事実をしっかり受け止めたい。	戦争や原爆の悲惨さを感じたと共に，同じ人間がこうも簡単に人を傷つけたり悲しく苦しい思いをしうるのかと思った。 「平和」とは何かについて真剣に考えたが，吉田さんであったと感じる。事実から目を背けずに，考え，行動していくことが大切であると学んだ。
2	方言を交えた実際の証言には，重みがあると感じました。 細川浩史さんが石綿浩一さんに語った資料館の展示物は作り物で「あんなものでは伝わらないよ」という言葉が印象的でした。*言葉には力があって「語り」を受け継いでいくことが重要だと思いました。*言葉は時として人を傷つけることもあり，被害者の身体だけでなく心をも傷つけていたこともあるという事実を知りました。 *フィクションではなく，当時の事実である「語り」を受け継ぎ，守っていくことが必要だと改めて感じました。*	*吉田勲さんの自分の体験から「核兵器をなくす」「長崎を最後の被爆地にしよう」「自分たちと同じ思いをしてほしくない」という熱意をもった行動は偉大だと感じました。* 「平和」と「核兵器」について大学の授業でも学ぶ機会は多くないため，本日は貴重な経験となりました。 核兵器は悪であるということを心に刻み，教育の現場でもこのことを伝えていく必要があると思いました。
3	細川さんから伝承した話の中で，細川さんの体験や想いが聞ける部分と，実際の数値などの情報も織り交ぜてくださって，当時の状況をイメージしやすい講話で，戦争のことや差別のことについて考えさせられる講話だと思いました。	吉田勲さんのお話を伝承していただいたということで，伝えようとする話し方が印象的でした。その当時の緊張感というのが伝わってきて，写真なども交えながら分かり易い講話ですごいと感じました。 *冒頭で聞かれた「平和」とは何かという問いを自分たちが日々考えて行動して，自らの手で平和な世の中を実現できるようにしていきたいと思います。*
4	原爆が落とされ，その地が三千度から四千度の熱に覆われ爆風，放射線でも人々がなくなってしまったこと，そして運良く生き延びても夜に死んでしまったり，死体の山を歩かなければならない地獄の様な環境の中，生きなければならないことを思うと，一生忘れることのできないおそろしさ，おぞましさであったのだろうと思う。 戦後70年以上経ち，広島平和記念公園には観光者や外国人が多く訪れているが，遺族にとっては，大切な人がねむっている場所であるため，静かな場所であってほしいと願う人もいると聞きました。大切な人がねむっている，骨が残っている場所を今後どう未来へつなげていくかが課題にもなっていくと思った。貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。	原水爆禁止宣言に心打たれ，国内外問わず，被爆者の使命として「勲」さんの名のように必死に世界で訴えた姿はかっこよく尊く思いました。 「最後の被爆地にしよう」「自分たちと同じような思いはさせたくない」といった強い感情が，また人の心を動かすし，平和を自分たちでつくっていくものにむずびつくのだろうと思った。 本日は，大変勉強になりました。ありがとうございました。
5	細川浩史氏の，建物内にいても爆風で5m飛んだという証言が，原爆のエネルギーの大きさを物語っていると感じた。また妹さんの日記や万年筆のようなものが，今となっては妹さんの生きていた証であり，遺族にとっては妹さんそのものだと思いました。そういう意味で，資料館だけでは分からない，被爆者，伝承者の言葉でしか分からない事があるなと感じました。	吉田勲氏の「長崎を最後の被爆地にしよう」という言葉がとても印象に残っています。48年間，現実から目を背けてきたという罪悪感を，一被爆者として平和を訴えなければならないという使命感に代えて活動していた吉田氏の姿が目に浮かぶような講話でした。
6	当時の様子や被爆状況を改めて認識することができた。また，秋田ではなかなか見ることのできない貴重な資料を見ることができ，貴重な経験となった。講話の中で心理的影響の大きさの話を聞き，普段では知ることができないことができてとても良かった。	*吉田さんの活動や長崎での様子といったことを知ることができ，とてもよかった。被爆者の想いや考えを多くの人に知ってもらうことの重要性や，それを後の若い世代に伝えていく使命といったことを考えさせられた。*
7	もちろん亡くなった方の苦しみは計り知れないところがあるが，生きている人も「心の負担」があって，どうして自分は生き残ったのかと人知れず責めてしまうことは，今回の話を聞かないと分からないことであった。 同じ広島に住んでいる人でも1人1人の体験は違っていて，被爆したことに対して否定的に受け止める人もいることがとても意外だった。被爆したことに対する傍観者や観衆の存在があることは，今のいじめの構図と若干似ているところもあるかなと思った。	*「自分たちと同じ思いをしてほしくない」という思いが，被爆者であった吉田さんの48年間誰にも明かさなかった姿勢を変えたのだなと思った。「どうして何もできなかったのか，してこなかったのか」という思いから行動した吉田さんの行動が，自分も被爆者でありながら他の被爆者も救うことへとつながったのだと思った。* 長崎という地に生きていても，何かきっかけがなければ行動につながらないということを知り，自分自身もきっかけを与えられるような大人になりたいと思う。
8	何の罪もない人が巻き込まれたという事実，身体だけでなく心に大きな傷を負ったということが胸に刺さりました。 *今日見せていただいた絵や写真でも悲惨さが伝わってきましたが，実際にはもっと凄惨な状況だったという話を聞いて，当時の様子を想像するのが苦しくなるほどでした。* 語りの中でいつまでも憎しみに囚われているのではなく，平和のため，後世に残すためにできることは何かと立ち上がる勇気や使命感，熱意が伝わってきました。憎しみ，悲しみを生む戦争をなくすために自分には何ができるかということをじっくり考えてみたいと思います。	自分にとって平和とは何か，それが突然奪われたらどうなるかということを考えるきっかけになりました。 原爆投下から被爆までのたった一瞬の間で人生が変わってしまった人，そこから長い間苦しみ続けた人がたくさんにたということを知り，心が苦しくなりました。 今なお戦争・被爆体験を継承しようと活動している人，それ受け継いで後世に伝えようとしている人，無念のまま亡くなった人の思いが絶えないよう，自分にも何かできることがないか考えてみたいと思いました。
9	生き残った被爆者の皆さんの心の負担にフォーカスしたお話は，初めて聞くことができ，新鮮な体験ができました。最初に“自分の立場に置き換えて考えてみてください”と言われ，考えてみましたが，月並みな言葉，表現にはなりますが，“耐えられないな”と思いました。自分が被爆しても，親しい人が被爆しても恐ろしくて耐えられません。それを考えると，後悔や罪の意識，限りない不安，あの場面からの逃避という心の負担を乗り越え，被爆体験を語ってくれる人々はとても強い人たちであると感じると共に，感謝の思いで一杯です。貴重な語りを，教師になる前に聞くことができて良かったと思います。ありがとうございました。	“長崎を最後の被爆地にしよう”や“自分たち（被爆者）と同じ思いをしてほしくない”というワードが出てきて，*自分や自分のほんのわずかな身の回りだけでなく，世界全体の平和という大きな規模で平和について考え，行動を起こし，活動していくのができることって本当にすごいことだなと思います。吉田氏の取り組みもさることながら，田平さんの行動力にも驚かされ，純粋に尊敬します。*自分や自分の身近な人の幸せで手一杯なので，そのような自分の視野が狭いことを少し恥じました。私もこれから教師になる身として，社会科を教える身として，戦争学習，教育は必要なものです。この話を聞いて，自分なりの「平和」について言えないと，子ども達に「平和」を教えることはできないと思います。このお話を聞けて，良かったと心から思います。ありがとうございました。

Akita University

10	*今日のお話を聞いて，被爆体験を継承していく必要性を改めて痛感しました。*実際に被爆の様子を写真で見たときは，悲惨で色々思うところもあり，また被爆者本人あるいは二世がその事実をコンプレックスとして感じ隠してしまうといったことからも，身体的，そして精神的ダメージがとても大きいと感じました。そして，そのような事+実は，決して忘れていってはならず，自分もそうした事実があることを念頭に置いてこれから生活していきたいと感じます。	吉田さんも48年間という長い間，自分が被爆者であることを隠し続け，また小学校の頃には，いじめにもあうという体験をされて，本当に精神的なダメージが大きいということを感じました。単純な死者数とか負傷者数で悲惨だと教えるのではなく，人々それぞれに深い傷が残され，そういった人の思いに寄り添っていけるようになりたいと感じます。
11	被爆体験を聞いたのは今回が初めてであったが，正直圧倒されてしまった。当時の状況というものが様々な資料(絵や写真など)を見ながら思いをはせることができる話でした。	*被爆という経験，体験がどれほどの痛みを与えるものなのかということが吉田さんの人生を通して知ることができた。“被爆者”というこのレッテルがいじめにつながったり，周りの社会からの圧迫が起きたりしたということがありありと映像がイメージできる話でした。*
12	石綿さんの語りは，具体的な例えや，実演があり，戦争を，原子爆弾を体験していない私でも想像しやすかったです。 妹さんの日記からわかるように，戦争とは言えど，そこには毎日を懸命に生きる人の日常があり，そこで生まれた楽しみや希望が一瞬で奪われてしまったことがわかり，心がつらくなりました。 その一瞬に限らず，その後の苦しみにも考えさせられました。体だけではなく，心に傷を負うことで，自分がもっと何かできたのではないかという自責の念にさいなまれること，光や音など，「その時」と思い出す事象によって何度も心を傷つけられることというように見えない苦しみが何重にもなるのだなと，そのつらさは計り知れないなと思いました。	*田平さんの語りは，私たちに訴えかけるもので，臨場感がありました。原子爆弾投下のお話もそうですが，投下後のお話や，被爆された方のその後の苦しみ(いじめや症状)についてのお話もたくさんしていただいてとても考えさせられました。*そこに，石渡さんの語りにもありましたが，人の言葉のおこさというものが共通していると思いました。また，それは現在にも共通している(いじめや差別)と感じました。平和の尊さというのは今すぐに出せるほどかんたんなものではありませんが，こうした機会をつみかさねていきながら考え，深めていきたいと思います。
13	今回の講演は「もし私だったら」という視点で聴かせていただきました。*戦争による被害によって，差別が生まれてしまうという事実を知り，とても胸が痛くなりました。おつかいのためのバスに乗った女の子が乗り合わせた少年たちに「おばけだ！」と言われ，途中でバスを降りたというエピソードは，とても悲しい気持ちになりました。*	*自分たちと同じ思いをしてほしくないという言葉がとても印象に残りました。それはつらい，悲しい，痛いなど様々であることも興味深いと思います。また，その多様な考えをどう伝えるかをこれから大切にして考えていきたいと思います。*
14	*石綿さんのお話を聞いて，一番印象に残ったのは「原爆は体だけではなく心に傷をつけた」という言葉です。*石綿さんのお話しで，被爆した人が皮膚がただれたりガラスが突き刺さったりしたと仰っていた。ただ話で聞くだけならTVでも知っていた。しかし，パワーポイントで写真や実際に目の当たりにした人の絵を見た時呆然としました。この光景を，カメラのレンズを挟むことなく対峙することになった当時の人々は，どんな気持ちだっただろうと思います。こんなんだったろうと想像はつきますが，本人たちからするとそんなレベルではないのだろうと思います。目の当たりにして，自分の家族が傷付いたり，亡くなってしまたりして深く傷ついたと思います。しかし，爆撃を浴びた後の悲惨な光景だけでは広島の被爆は終わらないということが分かりました。ただ，爆弾を持ち込んだアメリカを憎んでいるだけではないことが分かりました。*むしろ，自分が被爆したことにより自分が差別対象になってしまった悲しみや，自分だけ助かってしまったことへの後悔などがあって，しかもそれが何十年も続いていることを知り，これこそ自分たちが向き合うことの1つなのではと思いました。*	田平さんのお話を聞いて，被爆した方々の「その後」を知ることで，原爆が落とされたという事実に対する向き合い方の変化を知りました。石渡さんの話にもあったように，つらい記憶を思い出したくないからと忘れてしまう場合があるとのことでしたが，その後から向き合ってむしろ他の人に伝えていこうというプラスの変化を見せる人がいることを知ることができました。こうした被爆した方々の心境の変化を知ることができる機会は，交流証言者の方々の口から聞くことしかできないのではないかと思いました。非常に貴重な体験をさせていただいたと思いますし，心情を聞くことで，聞く，見るといった間接的な体験をすることしかできない若い世代の私たちにとって，戦争を身近に感じつつ真剣に向き合う機会になると思いました。 田平さんは，お話の中で「平和とは自らがつくるもの」と吉田勲さんの言葉を用いて仰っていました。確かに平和を求めていく上で，自分たちが唯原子爆弾を受けた国の国民として訴えていくことは必要だと思います。現にこのような悲しいことが起こったという事実があるからです。ですが，*私は授業で日本人は敵対していた国々の人々を苦しめてしまった過去があることを知りました。平和を求めていく上で，私たちはこの事実を受け入れながら被爆体験などの戦争体験を伝えていく必要があると思います。*先程，平和とはと聞かれた時，私は「世界が互いに互いのことを受け入れること」と言いました。このお話を聞いて，平和とは「世界が互いに自分たちがやってきたことを受け入れていくこと」なのではないかと思いました。
15	被爆体験の話は，もっと感情的で，凄惨さを痛切に語るイメージがあった。しかし，石綿さんの話は冷静で，分かりやすかった。事実が淡々と話されれる中，はさまれる悲惨な絵が事実を助長し，とてもリアルに感じた。 広島の原爆を題材にして描かれたこうの史代さんの「この世界の片隅に」が思い浮かび，あの話が本当だったのだと思った。それを原作として片淵素直監督の同名の作品では主人公が最後に「こんなに苦しんだのに敗戦は信じられない。最後の一人になるまで戦う」といったセリフが印象的だった。広島で被爆した人も同じことを考えたのかと疑問に思った。 感情的に話されると萎えるので，とても聞きやすかった。	長崎の原爆は広島より知らないことが多かったので新鮮だった。広島の場合，偵察機が飛び，計画された原爆投下というイメージを話を聞いて思ったが，長崎の場合は理不尽だと思った。 語り部を通じて被爆者の言葉を生の声を聞けるのは貴重だった。少しずつ無くなっていくものがたくさんある中で，語りついでくれる人はありがたいと思った（２人とも）。そういった人たちがいるからこそ残る「もの」（文化財や戦跡)があり，それを壊したりなくなったりすることが無いように，自分の進路からサポートしたいと思った。
16	*被害者の方々の絵や写真からとてもリアルな情景が伝わってきました。「爆弾が自分に向かって落ちてきた」や「皮膚がスライムのように溶けた」という表現が生々しさを感じさせました。* 瑤子さんがお母さんをずっと探していて，近くにいたおばさんに「手を握らせて」と言っていたことに心を痛めました。当時勉強したくてもできない子どもがいたということを聞いて，今平和な時代に生きている私たちはもっとがんばっていけると思いました。	いさおさんのおばあさんの「家の中に入らんね」という言葉でいさおさんは助かったという臨場感がとても伝わりました。愛知県に移住した後も被爆者ということを隠し続ける苦しみを味わっていたということに心を痛めました。 世界的に核兵器をなくす取り組みを伝える運動を通して，リアルな体験から世界中で核兵器を廃絶する運動が広がっていけば良いと感じました。 また，語りの口調からとても臨場感が伝わってきました。最後のいさおさんのお言葉を忘れないようにしたいです。

Akita University

17	今回，この講話を聞いてみて，今まで知っていた広島とは違う広島を知ることができた。今までは原爆が落ちて即死ししたり，川に逃げ込んだりして，町が一瞬に奪われたと言う様な事しか分からなかったが，当時起きたことを絵や語りで深く知ることができた。自分がもしあの当時普通に生活している時に被爆したら…と考えると，ガレキの下になった人たちや水をくれと叫んでいる人たちと同じようにもっと生きたいと思ったと思う。周りに人も生かしたいと思ったと思うが，自分も生きたいという葛藤をしたと思う。今，生きているのは，日本が戦争をしていないからだと思う。もし，戦争がまた起きたら？と思うと，平和には生きていけないと思う。世界が平和に生きていくためには，対立ばかりではなく，歩んでいかなければならないのでなはないかと思う。	私たちと同じくらいの世代の人が，原爆について語り継いでいきたいと思うことに尊敬します。*冒頭部分で「あなたにとって平和とは？」と問われた時に，私は「今，不自由なく生きていられること，悲惨な事件や事故がない生活を送られること」が平和なのではないかと思いました。*ですが，今でもいじめで苦しんで自殺してしまった人や事件・事故に巻きこまれている人が数多くいます。もちろん戦争で亡くなっている人もいると思いますが，吉田さんの「平和ほど尊いものはない」という言葉は大切だと思いました。
18	「息子/娘には話さないが，孫/孫娘には自身の被爆体験を話す」，この言葉から，戦争（被爆）の心のキズは四半世紀以上経たなければ治らないということなのか，それとも自身の死を目の前にして語る勇気が湧いたということなのか。そのようなことを思いながら，当時の悲惨な情景を想いました。	吉田さんの熱い思いが伝わりました。また語りの伝え方がとても上手く，吉田さんの想いが直接伝わったような気持ちになりました。
19	*被爆の被害にばかり目がいきがちだと思うのですが，いじめや差別について知ることができてよかったです。あってはならないことだと思います。* 爆風・熱線・放射線と言う言葉から「うっ…」と怖くなりました。爆弾よりも原爆はその後にもずっと苦しいから，絶対に同じことが起きてはいけないと強く感じました。細川浩史さんの被爆体験を聞いて，カメラのフラッシュやシュッという音などリアルでおそろしかったです。絵ですら生々しくその当時のむごさが伝わってきました。皮膚が垂れ下がってもなお，生きようと避難していた人の事を考えると胸が痛くなりました。 日記や万年筆など使用感のあるものに触れる（見る）と不思議とシンパシーというかぐわっと思いや当時の人たちの恐怖など少しでも感じることができる気がします。生きているのが一番いいけど，それがムリならせめて，という考えを知り，深く考えさせられました。	平和って1つの答えじゃないので自分の答えを見つけるのも難しかったです。「平和とは自ら作るもの」なのかと新鮮でした。 やはり長崎の方の写真も，悲惨さが伝わってきました。当時5歳でも鮮明に覚えているくらい怖かったんだなと思いました。 同じ長崎県民でも差別されるなんてひどいと思います。 被爆したことを話せずに，家族にすら言えないなんてつらいだろうなと思います。 勲さんは自ら活動して，行動して立派で強い人なのだと感じました。 日本だけでなく，世界で原爆がダメだという意識を持たなければいけないのはもちろんですが，実際に世界で活動していて，本当に行動派で驚きました。 「長崎を最後の被爆地に」という言葉は深いなと思いました。 戦争がなければ憎しみも生まれないですからね。なければいいんですよね。それは100％全てだと思いました。
20	今まで広島の被爆について，授業で話を聴くくらいだったため，どれだけ悲惨なものであったか，わかっているつもりであったが，実際に伝承者の方の話を聴いたり，今まで敬遠してきた実際に写真を見て，自分の認識が浅はかであったことを実感した。記念館の人形も，体験者の方々からしてみれば，作り物であると聞いて，体験者の方々から伝承者の方にと伝承されていくことがいかに大切か，ということを感じた。	*被爆したことで放射線で後遺症が残ってしまうことは知っていたが，被爆者へのいじめや，人付き合いの面で肩身のせまい思いをすることがあることを初めて知った。正直なところ，考えたこともなかった。被爆者は実際的な症状などの被害だけでなくいじめなどの被害もあったことを心にとめておきたい。*吉田さんはいじめを受けて，48年の空白があったにもかかわらず，自ら発信する側になり，
21	爆撃が来たら逃げる場が無い。下敷きになっている人を助ける余裕も無い。病人はもう助からないから水は飲ませるなという声があったのは「ショック」 「体」の傷だけでなく「心」に大きな傷が残ってしまう。 もし自分がその状況にあったら見殺しにしてしまったことをずっと後悔してしまう。 さりげない一言がずっと心に残ってしまう。	
22	戦争に関する一般的な共通する知識（被爆した人は皮膚が垂れ下がるなど）は，学校に通っていればそれなりに知ることができるが，いまいち自分のことのように感じることはできなかった。一方で，個人的なエピソードなどを聞けると，頭ではなく，心に響く気がする。*今後は，実際の被爆体験者が減り，それが課題にもなっているので，石綿さんのような伝承者が必要なのではないかと感じた。また，子ども達に伝える身として，このような話に触れることが必要だとも感じた。*	お話を聞いただけでも十分トラウマになることだと容易に想像できるようなことなのに，それに立ち向かい，使命として捉えることができるのはとても常人にはできないことだと感じた。やはり，事象として認識するよりも，その人の人と成りや，その人が当時どのように感じ，どのように考え，どのように生きてきたのかということも知った方が，そのことを深く考えたり，強く認識することができると思った。被爆体験に限らず伝えたいことがあれば，思いや価値観も一緒に伝えなくてはならないと思った。それを踏まえて，自分で考えてもらうことが，無関心やただ知っているだけではなく，それについて考えてもらうことが大切なのかなと感じた。
23	教科書や学校の先生からでは学ぶことのできない貴重な話を聞くことができました。特に印象に残っているのは，当時の被爆者の状態です。原爆により，皮膚が溶けてしまうというのは知っていましたが，「目が飛びがしてしまう」「内臓がでてしまう」という細かいところまでは知りませんでした。自分の頭では想像できますが，実際に日本で起こったというのは想像がつきませんでした。このようなリアルな状況を子ども達に伝えていく必要があると感じました。 貴重なお話をありがとうございました。	
24	*聞いているだけで，怖くて悲しくてつらくなってきた。当時の悲惨さがとても伝わってきて，被爆者の話などはテレビで聞いたことがあったが，比べ物にならないくらい，しっかりと伝わってきた。* 自分が教師になった時，子ども達に今日聞いた話を少しでも伝えていければと思いました。	*平和とは何かを考えさせられる内容でした。戦争がわるいものであるから，こういった活動で広めているのではなく，平和を目的として，こうした活動をされているのだなというのが，伝わってくるような講話でした。*もちろん，戦争に悲惨さも伝わってきて，自分もなにかしら子どもたちに伝えていく必要があると思いました。

・2019（令和元）年７月25日の講話直後に記入してもらったアンケートから作成。
・原文全部掲載。文字強調筆者。本文中の引用個所を強調した。